「人民」の刀目字々金玉繰返し拝讀
但し小生に在て汗顔の外無之
候……

西園寺公望

茅原廉太郎様

解　嘲

夜雨焚古香。瞑目坐禪堂。我當此之時。超然万慮忘」鐵衣護禁闈。軒冕弄危機。我當此之時。遇氣峭巍々」月下聽霜砧。風前彈素琴。我當此之時。一片白雲心」天地滿風塵。掃清待眞人。我當此之時。術數欺鬼神」嗟呼呼意足而情寛。心廣而躰胖。誰謂無要領。達人獨大觀」

九月六日曉起衝口而出書以博

華山詞兄一粲　　無邊眞逸

自ら人物評論の卷首に書す

空山樗櫪の棄才を以て大澤龍蛇の英物を評論せんとす群盲の摸象に類せずんば幸あるのみ

然りと雖も余が當代の人物を評論するは未だ必ずしも一々彼等を崇拜するが爲あらず又未だ必ずしも

彼等の研醐をして分明あらしめんの爲ならず苟も社會の上游に居る時勢は彼等に向て要求する所あき能はず余は時勢の爲に時勢に代て時勢の要求する所を要求せんと欲す夫れ人各能あり不能あり人物を知るの必要是に於て乎生ず

余は人物論を以て家を成さんと願はず加ふるに余の京に在るや僅に

三たび春風を見たるのみ依然たる亂頭粗服の一書生のみ交游未だ遍からず卷中の人物大抵互に相知らず其余を知らざる恠しむに足らず而して余は彼等の一言一行の末をも知らんと欲す若し未だ善く知らざるものあらば請ふ深く罪すると勿かれ

天下人才より尊ふべきはなし古人

か死馬の骨を買ふわ千金を以てしたるは之か爲のみ國家の人才を要する今日より急なるはなし苟も一技一能あるの士を表彰し提撕して各其所を得せしむるは亦經世の好手段たるを失はず讀者若し其眞意の存ずるを看取し兼ねて卷中言ふ所を以て之を今日に驗せば或い時時點頭する所あらん歟

余の文を作り詩を賦するや其散逸に任して嘗て顧みず啻に自ら其必傳を期せざるのみならず、縱ひ能く虛名を贏ち得て世間に滿つるも余に於て何の得失か之あらんや寧ろ風花雲月一時の觀を爲すに若かず而して世には余の文に對して極めて好意的あるものあり余が新聞社樓上限りある時間を偷みて一氣

呵成毫も添刪を加へさるの文を輯めて丁寧一冊子と爲す文にして知るあらば果して之を喜ぶ歟將た之を悲む歟

明治三十四年二月歟點の梅花春を回す處に於て

華山

伊藤博文……九
西園寺公望……二一
末松謙澄……二八
加藤高明……三七
渡邊國武……五〇
林有造……五九
金子堅太郎……七五
松田正久……八四

近衛篤麿……九三
片岡健吉……一〇〇
星亨……一一六
大隈重信……一二五
犬養毅……一四〇
佐々友房……一五〇
山縣有朋……一六五
高襟黨……一八八

人物評論

伊藤博文

華山　茅原廉太郎著

伊藤侯爵は今年今月今日を以て、政治上の新生涯に入らんとす、侯の政治上に於ける閲歴から、三十餘年に亘る、若し細かに之を黙檢し來らば、其變化の錯落たる、一々指摘するに耐へざるものあるべしと雖も、其兵庫縣人たりしより、三たび内閣に首班たるに至るまで、要するに是れ官場的生涯のみ、侯の生涯は一日も政府と相離れたることなし、偶々之ありたりとするも、嘗て身を以て國民的運動

の大潮流の中に投ぜざりしなり。

是を以て之を觀るに、侯が自ら進で新政黨の首領と爲り、國民の指導者たらんとするゝ、侯の政治的生涯に於ける一大轉化ならずや、吾人ゝ今日に於て、決して侯を贊頌稱美するの位置に立たず、唯侯を六十歳にして、始めて政治上の新生涯に入りたる白頭の一少年として、前途お向て、少からざる希望を屬するに過ぎず、世或いいふ侯ゝ志既に遂たり、功既に成れり、江湖に放浪するゝ其願なり、心尚君國に勞するゝ、固に己むを得ざるに出づと、吾人を以て之を視るに、斷じて然らざるなり、侯の何の志か遂げたりとする耶、侯の何の功か成れりとする耶、宮ゝ內閣總理に至り、爵ゝ侯に斑す、若し是を以て所謂志遂げ功成りたりと謂ゝゞ、侯の人物も亦豈小ならずや、然りと雖も、侯ゝ斷じて此の如くならず、侯の眼中お於てゝ、

殆ど過去の事業なかるべし、過去の事業なきに非ず、過去の事業ゝ未だ大成せず、徒らに之を誇るを以て老餘の樂と爲すの日ゝ、未だ到らざるなり。

侯ゝ深く國家万年の基礎を定むるを以て、中心の希望素願とし、常に身を以て、至難の局に當らんと欲す、宇內文明の進步的大潮流ゝ、日に其速かなるを加ふ、後進の帝國を以て、之に從はんとす、夫れ亦容易の業ふ非ず、人生老ひ易く、動もすれゞ輙ち遲暮の嘆あるを免れず、志の經國濟民に存するもの、尙何ぞ過去の事業を誇るを以て能事とするの暇あらんや、侯の過去の事業實に未だ大成せず、故お侯にして過去の事業ありとせば、是れ唯現在及び將來に對する一個の豫備手段のみ。

吾人ゝ侯の過去に於ける事業を以て、現在及び將來に對する一個の

豫備手段といふ、侯嘗て曰く、明治元年より十年に至るまでハ、王政復古の時代なり、十年より二十二年に至るまでハ、憲法政治施行準備の時代なり、爾後十年ハ憲法政治の試驗時代あり、と而して侯ハ常に言へり、余ハ憲法と共に生死する無限の責任を負ふと、夫れ帝國ハ總て憲法政治施行準備の時代を去りたるも、未だ全く憲法政治の試驗時代を出づる能はず、憲法に對して、無限の責任を負ふ所の侯にして、何の志か遂けたりとする耶、何の功か成りたりとする耶、侯が過去に於て、國家に貢献したるの事業、決して一ならずと雖も、憲法政治を以て、最も重且つ大なりとす、若し憲法政治にして、有終の美を成す能ハずんば、侯百の事業ありとするも亦必ず暗黑の中に埋沒し去らんとす、故に若し侯の事業をして今日に止らしめば侯の事業ハ是れ冒頭ありて、歸著なきものゝみ、前提ありて結論なきものゝみ、之をして歸著なく、結論なきに終らしむれば、其冒頭如何に壯麗なりとするも、其前提如何に雄大ありとするも、竟に半文錢だも値せざるあり、蓋し侯の事業、布局極めて大なり、心血を灑くこと三十餘年にして、尚未だ其歸結に達せざるは、侯の能く自覺する所、是れ侯が常に苦心して、將來を開拓する所以、而して希望ある將來が、常に双手を擧げて、侯を迎ふる所以なり、其老驥伏櫪、志千里に在り、暮年壯心、鬱勃として已む能ハざるの慨あるもの、豈に之が爲あらずとせんや。

吾人ハ「新政黨の首領としての伊藤侯」を世に紹介するを得るに至りたるに於て、轉た世局推移の甚しきに驚くと同時に、憲法政治を大成する機、漸く眼前に髣髴するに至りたるを喜ふ。

* * * * * * *

若し九仞の功をして一簣に缺かしむる勿れとの語をして、最も善く適用せらるゝものありとせば、是れ豈侯ぞの今日に於て立つ所の位置に非ずや。

吾人は萬、侯ぞ憲法政治に對する過去の經營と苦心との慘澹たるを了す、世、明治に入り、百度維新したりと雖も、我政府の組織、情實の複雜なる、殆ど多く其比を見さるなり、侯此左支右障の間に處して、枉て推移の力を費やし、憲法政治準備の時代より、憲法政治試驗の時代に推移し、更に將に憲法政治大成の時代に過渡せんとす、而して侯常に此中心に立てる主人公たるを失はず、侯は理想に富み、學術に博く、識見に高く、眼能く宇内の大勢を察す、侯は其始めて歐洲に觀風の游を試みたる當時に於て、早く已に帝國の亦遂に其政治に於て、今日の如くならざるべからざるを開悟したるなるべし、而

も侯は脚嘗て地を離れず、他人或は守舊に泥んで、時と推移するを知らず、或は躁急に失して、非常の事を輕擧に決せんとするに方り、一層は一層よりも高からんとを期し、一歩は一歩よりも進まんとを欲し、機宜を誤らず、情勢に負かず、羚羊の角を挂くるが如く、帆の江に從て轉ずるが如く、斧鑿の痕迹を示さずして、常に新局を開き來りたるもの、其れ豈又精力の人に過ぐるあり、包容の海の如きあり、意思極めて堅きも、敢て自ら暴露せざる實際的經國家の資あるに非すして、安ぞ能く是の如くあるを得んや。

然りと雖も、侯が三十餘年の事業は、到底今日及び將來に對する一個の豫備手段にして、未だ締結に達せざるなり、西人嘗て侯を稱して日本憲法の祖といふ、若し憲法にして諺に所謂佛造て魂を入ざるに終らしめば、是れ紙上の空文のみ、空文憲法の祖、侯に於て何の榮譽

か之あらんや、侯は超然主義を標榜して、侯の所謂憲法政治試驗の時代に入れり、當時上下の勢、其此に出でたるい、蓋し已むを得ざるものあるべしと雖も、超然主義なるものは憲法政治の政理より觀るも、法理より觀るも、將た何の價値か之あらんや、超然主義は直に攻黨操縱に一轉したり、政黨操縱も、亦政局展開の一小階段としての外は、其結果の寧ろ弊害を實際に釀せしのみにして、要するに一時を濟ふの姑息手段に過ぎず、再轉して、政黨の提挈と爲りたるも、此手段の亦上下和衷して、統治權の施用を全うする所以の道に非ざるは、直ゐ證明せられたり、是に於て乎、侯は明治三十一年に至て、自ら政黨を組織すべしと揚言するに至れり、然れども國氣民的基礎なき政黨は空中の樓閣のみ、其用うるに足らざるは、侯固より之を解せり、それ此の如し、超然主義といひ、政黨操縱といひ、

政黨提挈といひ、將た自ら政黨を組織すべしといふも、其自身に就て之を觀るに、憲法政治の常經として範を後世に貽すに足るもの、殆と一も之あらず、而して侯ごの何故に一時此等の姑息手段に頼りし乎、蓋し之を言ふは易く、之を行ふは難し、侯唯之を行はんと欲す、高からんと欲すれば、一層又一層ならざるべからず、進まんと欲すれば、一歩又一歩ならざるべからず、然れども誰か知んや、層一層進一歩の手段は、最も正經確實なる手段にして、今日に至て天下始めて、守に專らなるものは、虚しく時勢の外に排棄せられ、進むに急なるものは、反て幾たびか轉倒蹉躓して、獨り侯ごの造詣の深きを知るを得たり。

侯は遂に新政黨の首領として立てり、是れ實に侯に於ては、政治上の新生涯なり、新政黨の首領としては、過去三十餘年官場の歴史、

必ずしも成功の要素とならず、金章紫綬、峨冠大帶、又必ずしも成功の要素とならず、侯は赤裸々なる一伊藤博文として立たざるべからず、政黨的生涯に無經驗なる白頭の一少年として立たざるべからず。顧ふに自由黨ご過去二十餘年の歷史は、藩閥政府との衝突史なり、而して此藩閥政府に立て、自由黨當の敵たりしもの〻一人は實に伊藤博文其人に非ずや、誰か十年の前に在て、否、五年の前に在て否大隈板垣兩伯の憲政黨內閣を組織したる日に在て、侯と自由黨とご今日の關繫を生ずるを想はんや、而して世局の推移は、當年自由黨當の敵と自由黨とをして合体せしめたり、是れ豈偶然ならんや、蓋し其の眞意義の在る所を求むれは、維新改革より胚胎し來たりたる明治政府と、國民的勢力の結晶たる政黨とを一致せしめて、茲に上下を和衷し、憲法上の各機關を調和し、藩閥と政黨との爭を

一變して、政黨と政黨との立憲的公爭に移り。憲法政治大成の端を啓くものに非ずして何ぞや。

吾人は政黨の首領としての侯の資格を疑ふ能はず、侯は組織的天才あり、立法的技能あり、統御の術あり、雄麗の辨あり、殊に其私生涯の濶達磊落、極めに平民的なるは、大隈伯の豪奢自ら喜ぶに比して、寧ろ優れるを信ず、然れども政黨を御するは、官吏を御すると同一の筆法に由るべからず、且つ立憲政友會の宣言及び綱領は、必ずしも直に國民渴仰の心を滿足せむるものならず、蓋し是れ亦侯が周到緻密なる用意より來りたるものにして、羅馬の一日に建てられたるに非ざるを知るが爲ならんか、夫れ六十年にして始めて政治の新生涯に入り、專制君主として、興廢盛衰の責を一身に負ひ、以て新政黨を大成し、以て憲法政治を大成し、侯が三十餘年事業に反覆

して、之をして冒頭あり、歸著あり、前提あり、結論あり、燦然として光彩を發せしめんとする談何ぞ容易ならん、侯か前途は是より遠し。(三十三年九月十五日立憲政友會成り侯總裁となる)

西園寺公望

侯詩を好む、侯の人物の一端を評論せんとするに方り、司空表聖の二十四詩品中に就き、侯の髣髴を求めん乎、雄渾か、否、勁健か、否、含蓄か、未だ必ずしも然らず、精神か、亦未だ必ずしも然らず、侯の人物は、それ「飄逸」の二字之を盡くすものある歟、「落落として往かんと欲す、矯矯として群ならず、緱山の鶴、華頂の雲」侯は到底緱山の鶴あり、華頂の雲あり、更に之を約言すれは、鷄群の一鶴あり、侯の及ぶべからざるは、鷄群の一鶴たるに在り、若し侯の爲に惜むべきものありとせは、其れ又鷄群の一鶴たるに在る歟、侯の自ら語る所に由れば、侯の遊學して巴里に在るや、一夕星旗樓に飲す、偶々光妙寺水賓あり、侯未だ水賓と相知らざるなり、水賓屢々

視線を侯に向けしが、突如起て侯の傍に來りて曰く、甚麼なるか是れ風流と、侯聲に應じて曰く、執拗是れ風流と、水賓哄然大笑、手を把て始めて水魚の交を訂せりといふ、侯は果して執拗の是れ風流あるを解するの人ある耶、侯は果して一點星亨的執拗の價値を解するの人ある耶。

侯の學術は淵博あり、識見は高邁なり、眼に去來今なく、人に才學識あり、佛國に於て受けたる教育感化は、其已に太だ薄からざる天分を砥礪し、侯をして平民的の人たらしめたり、自由、平等、博愛の人たらしめたり、世界文明進歩の大潮流に棹す所の人たらしめたり、侯の巴里に於ける風流、一代を壓倒するものありと雖も、侯に於て最も敬服すべきは、能くギゾーの所謂歐洲文明の焦點たる佛蘭西の精粹を學び得たるに在り、國人の佛國に遊ぶもの、何ぞ限らむ、

然れども或は佛の法律を學びたるのみ、或は佛の兵法を學びたるのみ、或は佛の政治文學を學びたるのみ、甚しきに至ては、唯巴里子の外套を著け得て歸りたるのみ、獨り侯に至ては則ち然らず、侯は能く佛蘭西を消化したり、而も其精粹を消化したり、佛蘭西の癖を取らずして、其長を取りたり、侯ごの經國家的の識見、議論、才能、經綸、獨り侯の師アコラスと謂はず、佛國全般に負ふ所のもの豈鮮からんや。

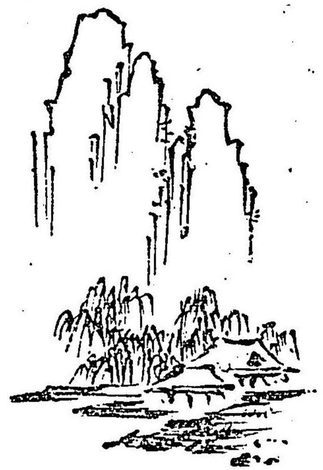
侯の巴里に遊學するや、佛國は方に近世史上最も多端なる時期に際せり、普佛戰後の共産黨の變亂、チエールの政府、ガムベッタの盛時を目擊し、交を一代の名流に結ぶ、侯の偉才大器を以てして、想ふに應に故國を望むで、雄心猛志の鬱勃たるに禁へず、大丈夫當に天下を掃蕩すべし、何ぞ一室に事とせんやの慨ありしあるべし、其

學成りて國に歸るや、東洋自由新聞を興して、自ら其記者と爲る、華胄社會に於ては、眞に是れ空前の事に屬す、固に以て天下の耳目を聳動するに足るものあるなり、吾人は一々侯の履歴を記せずと雖も、吾人は嘗て侯を參事院の議官として見たり、侯を獨逸の公使として見たり、侯を貴族院の副議長として見たり、文部大臣として見たり、外務大臣として見たり、侯は如何なる位置に立も鷄群の一鶴なり善き意味に於ても、鷄群の一鶴なり、惡き意味に於ても鷄群の一鷄なり、侯は果して幾何の動物的元氣あるか、果して幾何の動物的熱情あるか、而して幾何の動物的精力あるか、侯は常に落々として往かんと欲するに非ざる耶、矯々として群ならざるに非ざる耶、侯は未來の大宰相と推さるゝも、侯は伊藤侯に比して、其大志を千紛萬難の中に在りて行はんとする勇氣と耐忍とに於て缺くる所あるに

似たり、侯は大隈伯に比して、其敗れても沮喪せず、躓くも哀傷せず、困弊疲廢の中に在て、猶幾多の群政治家を鼓舞するの元氣と猛膽とに於ては、全然缺くる所あるに似たり、侯の學術や、識見や、獨り華胄社會、紈袴子弟間に在て、鷄群の一鶴たるのみならず、無數の經國家外交家の間に在ても、亦寔に鷄群の一鶴たるを失はず、伊藤侯をして常に侯の造詣の深きに嘆服せしむ、然れども侯は餘りに淡如たり、餘りに泊然たり、富貴は吾願に非ず、功名は期すべからず、節義は青雲に傲り、文章は白雪より高きも、遂に貧乏士族が隻手を揮ふて大澤に起り、ヴイクトル、ユーゴが所謂鐵壁の中にも虧隙を發見して、以て自家の進路を開拓し、墳墓に入て始めて已む底の執著力い、知らず安くに在る、豈是れ侯が遂に千金の子たるを免れざる所以に非ずして何ぞや。

吾人は侯を論ずるに於て、乘除せざるべからざるものあり、第一は侯が身を名門貴族に列するを以て、往々にして自由の意思を以て、自由の行動を爲す能はざるに在り、第二は强健の身体には、强健の精神宿る、侯の身体の頗る蒲柳質にして、疾病は往々侯の志を成すを妨ぐると是れなり、東洋自由新聞の如きは、前者の理由を以て、中廢したり、後者に至ては、毎々侯をして事を半途に沮せしむ、最近佛國の遊の如き、盲腸炎のために苦しめられ、辛くも玉の緒だけを繋ぎ止めたるのみ、然りと雖も、侯が飽くまで飄逸にして俗ならず、人と長短を競はず、人と優劣を爭はず、功名を土芥にし、富貴を浮雲にするの情は、侯をして歴史的利益ある事業を成さしめざる重なる原因なるなからんや、夫れ巨人の濶歩する、必ず深く其脚痕を大地に仰す、侯は果して何の脚痕を大地に印したりとする耶、果

して何の歴史的利益ある事業を成したりとする乎、侯の精神志氣の頗る旺盛なるあり、學術、識見の人に過ぎたるあるを以て、未だ事實の上に、侯の肩鴻任鉅的力量あるを論する能はざるは豈是れ千古の恨事に非ずや。



末松謙澄

語に曰く、珠磨かずん、光なしと、然りと雖も、珠に非ずんば、磨くも光なし。

男爵は固より瓦として生れずして、珠として生れたり、而も連城の璧として生れたり、天分は欺くべからざるなり、男爵は文學博士にして經國家たり、英國ケムブリッヂ大學の技藝士にして、法學士たり、男爵ゝ既に兩面を有す、而して其兩面を點檢すれば、面々多角多能、多藝多才にして、殆ど方物すべからず、文學博士、技藝士としての男爵を謂はん歟、男爵は詩人たり、歌人たり、男爵の所謂一口淨瑠璃たる俳諧も、亦其他能くする所たり、漢學者たり、國學者たり、而して洋學者たり、其洋學の中にも、法律政治等、經國家の

勢力範圍に屬するものを除き、英文學者たり、希臘羅馬の古學者たり、小說家たり、國文家たり、漢文家たり、嘗て新聞記者たり、美術の鑑査と批評とに至ては別に一隻眼を具し、美術を嗜好することを以て裝飾せらるゝに驚かざるは莫し、玄關となく、應接室となく、讀書室となく、居間となく、二階となく、下となく、皆然り、宛然たる一個の美術館なり、蓋し男爵に在ては、美術は人生の奢侈品に非ずして人生の必要品なり、其著譯の書に至ては、蓋し亦數ふるに暇あらず、希臘理學一斑あり、支那古文學史あり、谷間の姫百合あり、鐵壁集あり、青萍詩存あり、日本文章論あり、日本美術全書あり、防長回天史の草案等あり、其他文學繪畫に關する論文鮮からず、男爵は眞に連城の璧なり、人間斯才豈得易からんや、男爵は既に文

學生れなゞらに知るの楊億なり、越景絶塵、一日千里、男爵をしては、則ち只是れ一技一藝、己に兀々として一生を送了するに餘りあり、而して男爵は更に廊廟的氣象あり、經國家的資質あるに至ては、豈是れ人力ならんや、吾人は今專ら經國家としての男爵を一瞥せんとす。

世往々男爵を評して、氣象磊落曠達にして、而も其人格は厖雜混沌として、捕捉する所なしといふ、男爵と會見したる新聞記者は必ず其記事を結ぶに「語り了て例の如く呵々大笑せり」の句を以てするを常とす、男爵の性情最も美にして、僞惡醜の分子は、微塵も求むべからず、些の邪氣なく、些の毒氣なく、些の腹黑き處あるを見ず、男爵と對話すれば、那來の清風吹て襟ゑ滿ち、胸中卑吝の氣、頓に

一散するを覺ゆ、新聞記者を相手にして、敢て胸中の秘を語らず、尋常寒喧の話頭ならざるまでも、公の問題に就て介意なく談論するに方てや、男爵は毎々「呵々大笑」せらるゝに似たり、然れども「呵々大笑」豈經國家の資格ならんや、男爵ゞ經國家としての本領は、別に自ら在り、男爵は文學生れなゞら知るの人なり、文學者は心の人なり、情の人なり、血の人なり、血の人ならざるまでも、必ず涙の人なり、男爵實に涙あり、男爵の經國家としての立場は、小智を弄する所謂策士と其撰を異にす、主我的に妄執的に、我意我慢を推通す、所謂代言肌に非ずして、一片憂國愛民の涙に在るや、斷じて疑ふべからず、山縣内閣に至て、前内閣以來の宿題たる地租增徵案の議會を通過したるゝ、男爵ゞ自由黨代議士の頭上に灑きたる萬斛憂國の涙の力に由るとは、代議士の均しく語る所なり。

夫れ既に涙の人たり、心の人たり、情の人たり、性情最も美、從て僞惡醜を惡斥する極めて鋭敏ならざるを得ず、男爵の人格を見て以て徒らに厖雜にして捕捉すべからずと做すは全く誤れり、然れども或は言はん、身を持すること太だ皎潔、人に與みすること太だ分明なる者は、光を韜み德を養ふに難く、害を生じ禍を受くるに易し、男爵の獨り然らざるは何ぞやと、蓋し男爵は其文學の縱に長きのみならず、横にも亦極めて廣く、一身を以て、衆能衆才を兼ぬるが如く、經國家として男爵の立つや、同じく縱に長きのみならず、横にも亦極めて廣し、世には總ての人を一定の模型に鑄らんと欲するものあり、總ての人を己れに同ぜしめんと欲するものあり、是の如きは終に滿目荒茅白草の慘を免れず、男爵は則ち然らず、櫻を櫻とし、梅を梅とし、柳を柳とし、竹を竹とし、松を松とし、菫を菫とし、蒲

公英を蒲公英とし、松葉牡丹を松葉牡丹とす、男爵は薔薇の刺あるを知る、山吹の實なきを知る、然れども薔薇より刺を去り、山吹に實を結ばしめんとするものに非ず。

男爵の身を憲政黨に投じ、其總務委員となるや、人あり記者に謂て曰く、男爵は餘りに皎白なり、餘りに高風標なり、必ずや長く黨派の領袖たるに耐へず、白鷗浩蕩、誰か能く之を馴らさんやと、而して記者以て然らずと爲せり、蓋し男爵は最も忠恕の心に富む、人を尤めて極處に追究せず、早く轉頭するを解す、一面に於ては極皎白、極純潔自ら持すとも雖も、男爵は何人も個の大慈悲あり、維摩屠劍二心なきを知る、故に男爵の黨に在るや、星は星、林は林、松田は松田、片岡は片岡、老杤は老杤、若杤は若杤、ハイカラーリストは ハイカラーリスト、陣笠連は陣笠連、一々差別し來て、其短長を知

り悉くすも、男爵は到頭之を平等し來て、唯其事を共にすべく、親しむべく愛すべきを覺ゆ、男爵の總務委員として効ありしは、蓋し此性情あるに出づ、看得て常に圓滿、放ち得て常に寛平、天下豈缺陷の世界あやらん、險側の人情あらんや、男爵の敵衆かるべくして、而して實に敵寡なき所以は、唯此に在り、或は男爵を英の文學者にして政治家たるジョンモーレイに比するものあり、皮相は酷た肖たり、然れどもモーレーは其主張を貫かんとして、時として偏狹固執に陷る、自家神を信ぜずといふを以て、ゴッド(神)のヲーにカビタルレッターを用うるを廢すべしといふに至る、男爵は涙の人なり、同情深厚の人なり、故に極めて親切なり、男爵の人に對して親切なるが如く、黨に對しても親切なり、國に對しても親切なり、國家の憂を以て、自己の憂と爲し、黨の利害を以て、自己の利害と爲し、

是を以て自家の主張とし、爲に往々已れを忘るゝに至る、若し我國の經國家にして、正則に立憲政治家の教育訓練を受けたるものありとせば、蓋し男爵唯一人なり、男爵は立憲政治の日下開山たる英國、而もケンブリッヂ大學に留學して、大に得る所あり、又立憲政治家として、左なきだに生れなからにして、紳士的貴族的なる品性に向て修養を加へたり、其歸て衆議院議員となり、大成會に牛耳を執り、伊藤侯の所謂後進内閣に遞信大臣と爲り、更に憲政黨の總務委員と爲り、今や立憲政友會の創立委員と爲る、男爵は希望ある將來を有すと謂ふべし、既に希望ある將來を有す、豈一言なかるべけんや、記者嘗て日本外史を讀み、太閤六十猶枕甲眠といふに至て常に卷を蔽ふて嗟嘆せり、何ぞ知らん、大隈伯は六十餘歳にして、雄心猶鬱勃たり、伊藤侯は六十歳にして、始めて政黨的新生涯に入

り、白首の少年として、後進少壯の士と共に中原に馳驅せんとす、古今人相及はずといふは、決して當らざるなり、田口鼎軒嘗て深く男爵の英才を惜み、曰く、男爵は實に稀世の珍たり、唯其早く高科に登り、忽にして博士と爲り、忽にして貴族と爲り、忽にして大臣と爲る、其雄心猛志を沮ざるを願はざるを得ずと、蓋し鼎軒一人の言に非ず、吾人は男爵の伊藤侯に私淑せらるゝは淺からざるに於て此言の竟に一片の杞憂たらんことを祈る。(三十三年九月)

加藤高明

聲聞の實に過ぐるは、君子之を恥づ。

加藤外相の如き、亦少くとも今日に於ては、其閲歷事功に比して、名聞聲望の過ぎたるものなしと謂ふべからず、顧ふに加藤氏は時勢の後に在るの人に非ずして、時勢の前に在るの人なり、過故あるの人に非さるも、大なる未來あるの人なり、他日よりして今日を回看すれば、實の或は遠く聲聞に過ぎたるを發見するとなしと謂ふべからず。

加藤氏は明治十四年、東京大學首席卒業の法學士たり、嘗ては郵船會社の役員たりしとあり、嘗ては外相大臣の秘書官として、大隈伯爵の條約改正事業を翼賛したるとあり、嘗ては大藏省の銀行局長た

りしとあり、近くセント、ジエームスへの全權公使たりしといふのみ、彼れが今日までの閲歴事功は恐らく歴史の一頁若くは半頁をも埋むるに足るものなきなり、英國駐劄の公使として、チヤンベーレン等の交誼頗る深く、彼れの外相と爲るや、横濱の英字新聞が彼れを評して、「氏は十分英語に練達せり、氏の英國に公使たるや、多數英人の間に頗る聲望を博すると同時に、自國の利益を進捗するに怠らざりき」といへり、然れども彼れか公使として聲望を博したるを以て、全然彼れの力量材幹にのみ歸すべからず、彼れは或意味に於ては、亦幸運の寵兒なり。

彼れの簡派せられてセント、ジエームに赴くや、日清交戰の結果として、英國が其極東に對する政策を一變するの運ふ會せり、英國は始め支那を重しと爲し、日本を輕しと爲したり、獨りサア、チヤー

ルス、ヂルクが支那に傾倒したるのみならず、具翁の政府も、蘇侯の政府も、均しく支那を睡れる獅子として之を重しと爲したり、故に日清交戰の既に酣なる頃に於ても、英國は日本は始めに捷つも、終りには敗るべしとの忘信を拭ふ能はず、東洋艦隊の擧動、往々我意に滿たざるものあり、邦人の排英熱一時非常に昂騰したるとあるは、吾人の記臆に新なる所あり、三國干渉の事あるに及で、邦人の排英的感情は、一轉して排露的感情と爲り、從て英國の政策一變して、支那を輕しと爲し、日本を重しと爲し、英國の排露熱と日本の排露熱とは、日本が英國の干渉に加はらざりしを德とするの心と相合して英國に於ても、チヤムバーレン、ベレスフホート、バートレットの輩、熾に日英の同盟を主張するものを生じ、我國に於ても亦同じく日英同盟を主張するものを生じたり、加藤氏の全權公使と

して英人の間に聲望を博したる、此れ其一大原因たらずんばあらず。

且つ加藤氏の英京に在るや、我國は戰後經營の名を以て、過大なる軍備擴張を爲し、戰鬪艦より巡洋艦より水雷艇に至るまで、多くは皆な英國の各造船廠に注文し、英字新聞の到着毎に、加藤夫人ご命名式のミストレスたらざるを報せざるはなきの有樣なりき、加藤伯爵の名ご一時英國を動かしたる以なきにあらず、彼れが外交家としての二個の必要品……黃金と良妻とを有せり、彼れの夫人は、少くとも日本に於ては、惟一の富豪岩崎氏の女にして、彼れは固より他の貧乏公使の如く、交際費なきを名として、公使館内に終年籠城するの窮境に陷るを要せず、且つ加藤夫人は必すしも美にして艶ならずと雖も、英語を能くし、交際に巧にして、確に文明の婦人として、外交家の夫人としての資格を有す、自轉車を操りて、活潑なる英國

の貴夫人と馳驅するを辭せざるに至ては、安ぞ喝采を博せざるを得んや。

彼れは全權公使として幸運の寵兒たりしのみならず、彼れご其故國に在るも、亦自然に他より推重敬畏せらるゝの運命を有す、今日黃金万能の時代に於ては、三菱三井の如きは、自ら勢力を造らざるも、他ご之を勢力たらしめずんば休せざらんとす、黃金は言はず下自ら蹊を爲す「加藤は岩崎の佳婿なり」てふ一語は殆と總ての黨派をして加藤歡迎黨たらしめんとす、彼れ自ら黨派に投ぜざるも、黨派は何時にても、双手を開て彼れを歡迎するに躊躇するものに非ず、彼れは決して黨派的政治家に非ず、黨派を操縱するは、其長所に非ざるのみならず、彼れは始めより黨派的精神なし、且彼れ人を睹るの明なきに非ず、疾く己に大隈伯爵を見限りたり、然れども伯爵は到

底彼れを見限る能はず、彼れの外務大臣と爲るや、稱美推揚至らざるはなく、遂に彼の新位置は伊藤侯爵ゞ伯爵との私約を履行したるものありと言ふに至る、彼れは伊藤新内閣に外相と爲るも、敢て政友會の援助を頼むの心もなく、又敢て政友會の一員たらんともせず、而して政友會敢て異議なし、閣臣の撰任、一に元首の自由意志に出で、外間の容喙を許さずといふと雖も、若し彼れ以外の人物……矢野文雄……林董……西德二郎の輩を以ては、必ずや多少の紛糾を釀すなしと謂ふべからず、彼れは新内閣の新大臣として、新内閣の反對黨にすら歡迎せらるゝ、惟一の政治家なり、此れ豈彼れが力量才幹の然らしむるものならんや、彼れゞ背後の勢力然らしむるものゝみ、彼れは今日に於ては、少くとも聲聞の實に過ぐるものあり、彼れは果して此聲聞以上の人物たるを得る乎、將た彼れは竟に聲聞以下の

人物たる乎。

* * * * * * * * * *

彼れは幸運の寵兒なり。

世には二個の問題あり、何人も必ず一たびは、此二個の問題の一に向て解釋を試みざるべからず。

一は曰く、汝は如何にして自家の運命を開かんとする乎。

一は曰く、汝は如何にして汝の幸運を享受せんとする乎、是れなり。

彼れの解釋すべきは、後者に在り、彼れは最早如何にして自家の運命を開かん乎の問題を解釋するを要せず、然れども彼れは方に如何にして汝の幸運を享受せんとする乎の問題を解釋せざるべからざるの位置に立つ、彼れが政治家としての浮沈枯榮を決するは、實に彼れが如何に今日新に就ける職任を濟す乎否やに依て決す。

吾人は彼れの外務大臣としての成功を疑はず、彼れは殆ど天成の外交家ありといふべき資質を有すれバあり、彼は寧ろ一種の冷血動物として意思頗る鞏剛あればあり、彼れは冷算の人あり、冷思の人あり、冷想の人あり、彼れは利害の打算に長じ、決して感情の奴隷たらず、彼れは略世界の大勢に通ず、其學殖に於ては、青木前外相に及ふ能はずと雖も、亦英語に練達し、外國の新聞雜誌を精讀し、列國外交家の人物を解し、外交の法規典則を諳んじ、其形式上の智識に於ても、亦外交家たるを失はず、其青木子爵に優る處は、子爵の如く專ら一面を睨で遷る能はざると其撰を異にするに在り、聞く彼れは嘗て大に日英同盟を主張したりと、知らず彼れは今日も亦日英同盟の主張者ある乎。

其子爵に異る處い、子爵は身を藩閥に出したるも、藩閥に容られず、

反て知己を人民に得んとするの心あるに反して、彼れは藩閥以外の出身あるにも拘らす、其背後の勢力は、其天性を成就して、殆ど眼中に黨派あからしめたり、其子爵と相似たるは、自負自任の氣象極めて高きに在り、鷹揚あるに在り、但た子爵は感情の頗る熾烈あるに反して、彼れの冷血にして、細故に齷齪たらざるは大臣宰相として、子爵の及はさる長所を有すと謂ふべし。故水野遵曰く、彼れは尾張人として珍らしき尾張人ありと、彼れはラチン的に非ずして、較々チユートニック的あり。

外務大臣が其手腕を試むべき問題は、眼前に横れり、何ぞ、清國問題是あり、朝鮮問題是れあり、吾人は此等の問題を以て決して小問題ありとは謂はざるべし。去れど必ずしも此問題の一は全世界に關繫し、一は北隣の强國に關繫するの故に難難ある大問題ありとは信ぜず。

清は保全すべくして保全し、分割すべくして分割す、如斯而已、保全するは善に非ず分割するは惡に非ず、保全と分割とは善惡の問題に非ず、唯帝國利害の問題あり、帝國の利害と列强の利害と調和するに於て、飽くまで協同の動作を執り、以て進み以て退くに於て、清は何ぞ必ずしも外交家の手に負へざる大問題ありと謂はんや、清の問題を解釋するに必ずしも、日英同盟を主張するの必要はあらず、倫敦支那エキスプレッスの主筆アンジャー氏曰く、英國は日本に對して深厚なる同情を有す、今や英國と日本とは、極東に於ける利害一致す、去れども外交の規準は利害あり、利害合すれば握手し、利害異なれば揆離す、已むを得ざるあり、日英同盟と謂ふが如きは、必ずしも主張するの必要なきなりと、此論大に吾意を獲たり、我れも亦英國に對して、同一の言を反覆すれば足る。

日本は英國と利害頗る一致せり、然れども日英の利害一致すといふは、斷じて日露の利害衝突すといふの前提とは爲らず、露國が滿州に於ける條約上の權利を擁護するの範圍に於て、自由行動を爲す、我れ之を妨ぐるの理由なし、其旅順大連を租借したるは、既成の事實にして、我れは今更之に向て故障を謂ふべくもあらず、露國が全然滿州を占領するも、我れに許すに朝鮮を保護するの權を以てせば我れ亦必ずしも容易に兵を謂ふの必要あらず、露國が不凍港を有すると否やとは、露國の死活問題なるべし、此の如く朝鮮は我れの死活問題なり、獨り奈何せん露國は我れを誤解せり、我れの朝鮮を以て滿足するものに非ず、更に進で朝鮮より大陸に志あるを疑へり、若し能く露國にして我れの大陸政策を抱くものに非ず、而して露國も亦滿州を以て滿足せず、朝鮮に南進するの異圖を有するものに非

ざるを明にせば、日露の關繫は毫も英國の利害と相渉るおくして、一朝にして煥然氷釋するを得べし、帝國は極東の雄邦あり、自主の邦あり、一面英と携へ、一面露と親み、以て大局に周旋せば、久しく極東の天に瀰漫するの戰雲を一掃して、平和の天日を仰ぎ、極東問題は自ら解決せらるべし。

日本の外交家にして、露國に信用あるものは、伊藤侯爵、西男爵、林等に過ぎず、彼れは露國人よりして、親英黨なりと稱せらるゝは或は彼れが外務大臣として其政策を行ふの妨けと爲るなきを保せず と雖も、其英國人に對して無上の聲望を有するは、彼れが外交の運用をして、極めて圓融自在ならしむ、況や彼れの弱點は、伊藤侯爵之を補ふて餘りあるに於てや。

彼れ冷血動物を以て、意思鞏剛の人を以て、極東問題解決の重任に

膺る、吾人は彼れが能く自家の幸運を享受し得る力量材幹あるの人にして、今日露聞の實に過ぐるは、他日之を顚倒して、實の聲聞に過ぐるものあるを發見し得るを望み且つ信ずるあり。(三十三年十月)

渡邊國武

若し今の世に最も要領を得ざるの人物あらば、渡邊國武翁の如きは疑もなく其一人に非ずや。

翁嘗て未だ四十に達せざる森槐南を呼で翁と做す、既に五十の坂を越えたる子爵渡邊國武を翁といふは、斷じて殘忍酷薄あらず、而して此翁や眞に要領を得ざるの翁あり、翁の邸は麻布の本村に在り、怪物屋敷の名界隈に高し、天下豈怪物よりも要領を得ざるものあらんや、翁の大磯なる別墅を夜雨莊と扁す、怪物屋敷、夜雨莊の主人ご要領を得ざるの人物なるは、蓋し自然の理か、要領を得ざる第一。

一たび所謂怪物屋敷を訪ひたるものは、記憶せん、前大臣の起居する樓閣の安くに在るかは、遂に求むべからず、見そぼらしき玄關に

矮小なる離れ屋、一二回の往訪にては、到底要領を得べからず、要領を得ざる第二。

唯樹木の鬱然として森を成すを見る、宛も深山幽邃に入りたるご如し、蝦蟇の池、獨り大にして、之を庭園と稱するには、餘りに蕪雜なり、規摹もなく、趣向もなきが如し、而して翁之を愛し、日夕逍遙す、要領を得ざる第三。

翁は全く禿頭に非ず、中、禿にして、外、之を圍むに薄黑き毛髮を以てす、自然蝦蟇の池に似たり、禿頭にもあらず、禿頭ならざるにも非ず、要領を得ざる第四。

翁の面は平扁なり、眼も敢て巨からず、鼻も敢て隆からず、鬚髯共に無し、之を望むに愚なるが如く、智なるが如し、要領を得ざる第五。

其肉体は持て餘す程大兵肥滿、總身に智慧が廻り兼ぬるかとも思は

るゝも、必ずしも然らす、要領を得ざる第六。

人あり、翁に問ふて曰く、新政黨は何如、翁曰く、上御一人の御信任を得、下四千万人民の心を得、天下の事成らざるはあし、何ぞ新政黨といはんやと、其人返す辭もなくして去る、要領を得ざるも亦甚しからずや、要領を得さる第七。

翁墨を磨し、大筆を揮ふて淋漓書して曰く、人あり翁に書を求む、翁「天空海濶」の「大丈夫須有呑天之志」と問ふに九字の意を以てすれど、笑て曰く、讀で字の如し、要領を得ざるも亦甚しからずや、要領を得ざる第八。

翁自ら號して「無邊俠禪」といふ、已に無邊あり、捉ふべからず、攫むべからず、要領を得ざるも、亦甚しからずや、翁「天空海濶」の印首あり、常に好で之を用う、無邊に乘ずるに天空海濶を以てす、要領遙々得べからず、要領を得ざる第九。

翁好で詩を作る自ら詩に定義を下して悪言の具といふ、然れども翁の詩の世に傳はるものを見るに「獅子一吼時。百獸惱破裂」といふあり、「閑窓無一事、笑對地球圖」といふあり、天地、乾坤、大觀、風雲。萬里。龍虎等の大言壯語的要頃を得ざるの字面多きを占むること如し、要領を得ざる第十。

翁禪學を嗜み、哲學を講じ、著す所の書あり、翁は果して大地山河、已に微塵に屬す、而るを況や塵中の塵をや、血肥身軀、且つ泡影に歸す、而るを況や影外の影をや、上々智に非ずんば、了々心あしと濟まし込むの人ある耶、翁の禪は、大乘禪か、小乘禪か、野狐禪か鵶鵶禪か、何人も之を孰れかに然定するものあく、又否定するものもあし、要領を得ざる第十一。

翁は邊幅を修飾せず、書生を愛し、野人に接す、翁は其鄕學生の寄

宿する長善館に館長たり、麁末なる衣服を着けて、書生と共に、遊戯す、書生の翁を尊信する神の如し、然れども汝は何故に翁を尊信するかと詰問すれば、一人も滿足に答へ得るものなし、要領を得ざる第十二。

聞く翁は好で鬼谷子、戰國策を讀むと、翁は權謀術數の士なるゐ似たり、然れども翁の蕩々平々、嘗て縱横の略を弄せずといふものあり、要領を得ざる第十三。

翁には果して敵あるか、私人としての敵あるか、公人としての敵あるか、翁の閲歴に於て、豈一人の敵なしと謂ふべけんや、然れども明白に翁に敵對するものあく、明白に翁の敵視するものもなきゐ如し、新聞紙多しと雖も、彼れに向て頌德表を奉るものなし、去りとて彼れの爲ゐ斬姦狀を草するものもなし、恩讐果して分明ならざる

耶、要領を得ざる第十四。

翁の大ゐ世に知られたるは、政府委員として議會に出席し其答辯の太だ要領を得ざるに始まる、尾崎行雄との一錢一厘の問答は要領を得ざるの極に非ずや、若し夫れ、彼れも一時あり、此れも一時あり といふに至ては、人往々翁ゐ得意の禪機を弄したるを稱するも、其要領を得ざる、是に至て益々極まる、要領を得ざる第十五。

夫れ是の如し、天下豈翁の如くに要領を得ざるの人物あらんや、翁や、身を信州諏訪藩の貧乏士族に起し、藩閥の餘蔭なく、維新の勳業あく、筑摩縣の一俗吏よりして、先きには大久保公に知られ、後には伊藤侯に知られ、何時の間にやら、縣令と爲り、何時の間にやら、局長とあり、何時の間にやら、次官とあり、何時の間にやら、大臣と爲り、何時の間にやら、新政黨の創立委員長と爲れり、翁の

始めて大臣と爲るや、世乃ち曰く、翁は事務官のみ、大刀筆吏のみ政務官として、國家の樞機に參するの器に非ずと、而して翁や何時の間にやら、保險附の大臣株持と爲れり、翁や大臣の株持と爲るも政黨の領袖と爲るべしとは、近ごろまで何人も想像し到らざる所、而して翁や何時の間にやら、政黨の洗禮を受け、新政黨の參謀長と持囃され北信の雄鎭たらんとす、翁は決して出處進退の際に誤らず固より議すべきの迹なしと雖も、特に際立て人耳を聳えしむるものはあらず、音もなく、香もなく、聲もなく、臭もなきの間だに、翁は日一日年一年と開運し、殆めに人をして其立身出世を想望せしめずして、後に至て漸く何時の間にやら立身出世したるに氣附かしむ過去にして已に然り、雲蒸龍變、將來豈測り易からんや、然らば則ち其大に要領を得ざるの如くなるものは、更に大に要領を得たるものあるに非ずして何んぞ。

翁や身を藩閥と最も緣遠き地方に貫するも、其登龍門は藩閥政府の外に求むべからず、藩閥以外の雄才にして、失脚して民間に落ちたるもの寡からず、要領を得ざる翁の如くにして、始めて藩閥政府の間に處して、其要領を得る所以に庶幾しと謂ふべし、翁が其頭部より、其言語より、其動作より、總て要領を得ざるが如くなるは、適まる翁の天分の高きを證する所以に非ずして何ぞ、世には餘に要領を得たる者あり、身を持する太だ皎潔、人に與みする太だ分明、汚辱垢穢を茹納し得ず、善惡賢愚を包容し得ず、爲に人の詐を覺て言に形はし人の侮を受けて、色に動かさゞる能はず、此の如きは、豈無窮の受用ある所以あらんや、自然に福薄く德少く、世に處して最も人禍を受け易し、翁は刻苦精勵、學問工夫の功、蓋し

復た淺からず、書を讀で古今東西に亘り、諸科の學術を修む、幽を闡き微を顯はすは、翁の長ずる所に非ずと雖も、能く大局を達觀し大体に通曉して、一々要領を攫む、其世を渉るや、蓋し亦巧を描に藏し、清を濁に寓し、晦を以て明と爲し、屈を以て伸と爲す、其渉世の一壺、藏身の三窟を得たるもの、學問工夫の功ありと雖も、豈亦一々人作あらんや、天の與ふるもの決して薄からず、翁や機を見るに敏あり、事に感じ興に觸るゝに遲からず、然れども其世を渉るの迹を見れば、燥性あらず、寡恩あらず、而も凝滯固執あらず、火の熾なるが如きあく、氷の清きが如きあく、而も死水腐木の如きあく何時の間にやら、時と推し、世と移る、翁の常識あり、虚圓の人たるや知るべきのみ、嗟呼世豈翁の如くに要領を得たるものあらんや其大に要領を得ざるが如きは、即ち大に要領を得たる所以なり。

（三十三年九月）

林有造

議院政治は言論政治ありとは、誰か言ひ初けん雄辯家として名を成す所の議院政治家固より其人に乏しからず、然れども其多數は大抵是れ「口あいて五臓の見ゆる柘榴かな」の類にして、議院の傍聽者をして他人の事あからも、往々にして「默つて居れば善いのに」と私語せしむる柘榴的政治家のみ、口は禍の門りありとは、第十九世紀言論政治の時代に於ても、亦一端の眞理たるを失はずと謂ふべし。

奚ぞ知らん、言論政治たる議院政治の中に在ても、其無言ある、啞の如くにして、猶且つ大名を成す所の人物あるを、帝國黨に於ては佐々友房、進歩黨に於ては、犬養毅、而して自由黨に於ては、林有造の如き蓋し亦其人ありと謂ふべし、三人者は決した訥辯家に非ず

各坐談に長じ、而も各坐談家の特色を具ふ。佐々の能く口説く、犬養の能く罵る、亦他人の及ばざるものあるべし、而も佐々といひ、犬養といひ、林といひ、其議院に在るの日、決して短しとせざるにも拘らず、議院の日参者も、彼等あるの故を以て、議院の傍聽者を兼ねるに、議院の傍觀者たらざるを得ざるあり。

若し世の中に口より先きに生れたるものありせば、土佐人是れあり土佐人は天の成せる雄辯家あり、東北人は鼻音を帶び、口と鼻とを以て語る、咽喉より口に出づると同時に鼻に拔けるを以て、東北人と會話するに方ては、鼻に注意せずんば、往々理解する能はず、九州人は喉音を帶び、咽喉の奥にて窮屈然として語る、宛も不完全なる電話を聽くが如きあり、關東人は唇頭を以て語る、故に眞摯の言と雖も、動もすれは輕薄に堪へざらんとす、獨り土佐人は音吐朗々、

關東九州の折衷辯を以て、咽喉と唇頭とを巧者に利用し、人を見れば直に語らんと欲す、而して土佐人たる林有造は、嘗て演說家雄辯家を以て稱せられず、己れ亦嘗て演說家雄辯家たらんとしたるときが如し、偶々己むを得ずして演壇に立つも、田舍の傍聽人さへ、彼れの辯舌には、敬服する能はず、林有造の名、一時天下に轟きたる時代に方て、彼れの田舍演說を聽きたるもの、何故に彼れの雷名が爾かく天下に轟くかを解する能はず、唯田舍の傍聽者をして、彼れの傍觀者たるを餘儀なくせしめ、自由黨の名士たる彼れを耳にて聽かずして目にて觀たるを以て名譽としたりき。

土佐人が天下を横行したる重なる武器は、其辯舌ありしを疑はず、而して獨り彼れに至ては、則ち然らず、彼れは天成の雄辯家たる土佐人として生れながら、敢て辯舌を弄して武器と爲さず、是れ豈土

佐人中の異彩に非ずして何ぞ、土佐人が天下を横行したる重ある武器は、所謂自由民權ありしを疑はず、立志社の土佐に起りしや、彼れは其領袖の一人ありき、立志社といへば、政治的の集團にして、自由民權の說を提倡して、天下を風靡したるものあり、然れども彼れは孜々として村學究を學び、自由民權の理論を講じ、ルーソー、モンテスキユースペンサーの糟粕を嘗めて、自ら快ありとせざりき、彼れは天成の雄辯家たる土佐人が自然に理窟屋たるにも拘らず、敢て理窟を弄して武器と爲さず、是れ豈又土佐人中の一異彩に非ずして何ぞ。

我國は封建政治より一躍して立憲政治に入れり、今日に於て、立憲政治家の模型を把て、之を先達の士に求めんと欲するは、是れ難きを人に責むるあり、然りと雖も、如何なる世にも、肚皮裡無一物の

空洞にして、而も能く口舌を皷するものあり、是れ口舌の爲に口舌を皷するものにして、辯の下なるものあり、多少の素養なきに非ざるも、口舌の力之に倍するものあり、或は思ふたとは言はで止む能はざるものあり、見れ辯の中なるものあり、肚皮裡に停貯蘊蓄することゝ、眞に測られざるものあり、必要あらば、時に其一端を洩らし時に懸河の雄辯と爲る、是れ辯の上なるものあり、彼れは所謂雄辯家に非ずと雖も、其雄辯家たらざるは、田舍巡りの芝居小屋演說會に於て、雄辯家たらざるのみ、衆議院の演壇に於て、雄辯家たらざるのみ、然れども彼れは確に一種の雄辯家にして、其雄辯は實に辯の上なるものに屬す。

英國に於ても、ピット、フォクス、ベークの時代は、既に去れり、チャレリー、グラツドストーンの時代は、既に去れり、速記術の發達、

新聞業の隆昌、外交問題ゞ國家惟一の大問題と爲り、而して人ゞ感情に動かされずして專ら理論を重じ、理論よりも實利を重んずるに至ては、演說は一の儀式と爲り、雄辨の流行、復た古の如くあらず然れども英國の如く議院政治の十二分に發達したる國に在ては、演說の重んらぜるゝ未た必ずしも多く減せず、我國に至ては、立憲政治日淺くして、未だ大雄辨家を生ぜず、而して國民の政治的訓練の乏しきと、撰擧の制度の不完全とは、殆ど文明の利益たる演說を閑却すると、武士の双刀に於けゞる如し、撰擧に演說會を開らくの無用なるは、空砲を敵に放つよりも無用なり、政黨の遊說に懇親會を開き、遊說の名士、自ら杯を賜はれば、其政黨の綱領をも問はずして入黨するもの比々皆然るも、幾回演說會を開くも、一人の入黨者あきなり、衆議院に於ても、亦固より然り、我國に於ける衆議院は

言論の場に非ずして、沈默の場なり、睨み合ひの場なり、三百の頭顱、時々擧擧區への土產として、鶏鳴蟬噪の態を爲すものあるも、こは大抵所謂陣笠連のみ、國家の大問題にして、議院ゞ其意思を天下に明白にせざるべからざる場合に方ても、領袖等は、默して語らず、唯睨み合ふを以て能事と爲すのみ、衆議院は豈是れ衆默院に非ずや、衆默院に在ては、有用の辨も、亦是れ無用の辨のみ、苟も辨を弄すれば、自ら好で陣笠連に墮落せざるを得ず、而して政府の大臣も、白頭にして始めて立憲政治に遭ふ、立憲政治家の素養なき固より其所なり、政府の大臣ゞ議場に於ける演壇に登るは、屠所に牽かるゝ牛も啻ならず、彼等は鐵砲丸を怖れざるも、議長席の前なる演壇にコップの人待ち顏なるを見ては、寒からざるに膚に粟を生ぜざるを得ず、議院の領袖に演說家討論家なく、政府の大臣に議院政

治に慣れたるものあきと、孰れも組織的學術のあきとは、遂に衆議院をして衆默院たらしめたる重なる一原因あるかからんや。

彼れ常に實際に何事をか爲さんと欲す、彼れ何ぞ此の如き時勢の間に在て、演説家たるを勉めんや、立憲政治の組織的學問に勉めんや故に彼れは立憲政治家として、固より變則の政治家なり、然れども我國の立憲政治其物さへ、既に變則なり、政府政黨も皆變則の政治家を以て充溢せるに於て、彼れの其力量手腕を指揮するの地は極めて大なり、彼れは演壇の上に、其土佐人の特長たる雄辯を用ゐずして、座談の上に用ゐたり、彼れ「然り」といふ、如何にも「然り」といふが如し、彼れ「否」といふ、如何にも「否」といふが如し、彼れ「承知しました」といふ、山崩れ海立つも、「承知しました」といふが如し、言語明晰にして抑揚自ら節に合し、而も膽氣自ら人を

壓し、風骨自ら人に逼るか如きあり、最近十年、彼れが自由黨の領袖として、其雄辯は縱しや天下に轟かすとも、必ず結果を生すべき方法に於て、坐談の上に、密室の裡に、應接室に、西洋館に譽きしあり、演壇上の演説に、利害得失よりも、理論辨難を先きにす、坐談に至ては、理論辨難よりも、利害得失を先きにす以て彼れの理論辨難よりも、利害得失を先きにするの人あるを知るべし、以て彼れの舞臺の人に非ずして、樂屋の人あるを知るべし、彼れは如何なる場合にも傀儡師と爲るとも、決して傀儡と爲らず、聞く伊藤侯嘗て彼れを稱して策士といふ、彼れ怫然として色懼はず、更に呼ぶに老壯士を以てす、彼れ乃ち首肯したりと、知らず樂屋の中に在る彼は策士乎將た老壯士乎。

* * * * * * * * * * * *

過去十年、自由黨が八方より被ふりたる攻擊の矢は何ぞ、曰く自由黨は腐敗したり、曰く自由黨い買收せられたり、曰く自由黨は變節したり、曰く自由黨は藩閥政府に降伏したり、知らず、此等の攻擊批難は、如何なる標準より來りたる乎。

自由黨は第一議會以來、屢々政府と交鋒して交綏したり、自由黨い藩閥打破、責任內閣を以て、其旗幟標語と爲したり、其旗幟標語を有する自由黨が藩閥政府と交綏したるを以て、之を腐敗といふ乎、之を變節といふ乎、之を降伏といふ乎、凡そ大目的とする所は、漫りに變すべきに非ず、然れども其手段に至ては、必ずしも一に拘泥すべからず、正面攻擊は唯一の攻擊法ありとは、支那の士官も敢て主張せざるべし、正面攻擊お出づべくして、正面攻擊、側面攻擊の出づべくして側面攻擊、一正一奇、一直一曲、大珠小珠の玉盤に轉

ずるが如く爲すべきのみ、自由黨が藩閥と交綏したるは、唯藩閥打破の手段のみ、正面攻擊に出でずして、側面攻擊に出でたるのみ、正に出でずして、奇に出でたるのみ、而して維新改革以來「世界に於ける日本國家」の位置形勢は版籍奉還より憲法發布お至るまで、總て之を平和の間お成就したるが如く、藩閥打破も亦藩閥と政黨との交讓調和に出でざるべからざるは識者の早く已に看破したる所なり、誰か知らん、憲法實施十年の後に於て、伊藤侯は藩閥より出て自由黨と共に立憲政友會を組織し、茲に藩閥と政黨とを化合和一し憲法試驗の時代は漸く去て、憲法大成の曙光、始めて全國民お微茫の裡に認取する所となりしを、當時、自由黨を攻擊して、有ゆる惡名を被ぶらしめたる改進黨、進步黨、自由黨を腐敗したりと稱して、脫して反對黨の陣營に投じるたもの、新聞記者、辨士の輩も、十年

の歴史を點檢し來れば、或は自由黨の爲す所に倣ふて、藩閥と提携し、或い自家の不利を覺りて、翻て藩閥に使へしものあり、彼等は啻に正大精白なる標準なく、唯一時の利害感情よりして、漫然自由黨を攻擊批難したるのみならず、事實渠輩は自由黨を攻擊批難するの權利なきものなりしなり、而して藩閥を政黨に化合和一せしめて事實藩閥打破の主動者たりしもの、實に自由黨に相違なしとせば、渠輩は宜しく自由黨の門前に來りて、其僭越不明の罪を拜謝すべし。

而して此等攻擊批難の標的と爲りしものは、政府に於てい、陸奥宗光、伊東巳代治等、其重なるものなり、自由黨に於ては、星亨、林有造、松田正久、其他の總務委員領袖なりしなり、吾人は彼等の言動の細條末節までも回護辨明するの義務を有せずと雖も、彼等の能事は、唯自由黨を腐敗、買收、變節、降伏せしめんとするに在りし

乎、自由黨は惡魔を其領袖に戴き、以て政府の惡魔と交渉したる乎第一議會に於て、山縣内閣との衝突、殆ど其極に達し、議會と政府と茲に交讓調和するや、林有造は即ち裡切議員として攻擊の鎗丸に上げらけたり、第二次伊藤内閣と日清の交戰後、公然提携したるに方て、林有造は與りて固より力あり、是に於て乎、彼れ復た攻擊の鎗丸に上げられたり、第三次伊藤内閣との提携に至ては、事意の如くならざるものあり、彼れは内閣と提携を絶ち、自ら交渉の顚末を報告して、責を一身に負ひ、不明を謝して已みぬ、是に於て乎、彼れは更に攻擊の槍玉に上げられたり、陸奥此の如く、伊東此の如く星此の如く、他の自由黨の領袖皆此の如し。

然れども、彼等の心事を正直に解剖し來れば、或い一時の利害も打算に入りたるなるべく、或は政府も政黨の後援なくして、議會を切

抜くる能はざるを以て、切抜政策も打算に入りたるあるべく、或は藩閥容易に打破すべからず、長く逆境に處するの艱難なるを以て、姑く交綏して、時機を待つべしとの姑息政策も、打算に入りたるなるべしと雖も、彼等亦實に「世界に於ける日本國家」てふ大觀念に驅られ、藩閥は打破せざるべからずと雖も、之を打破するの手段は藩閥と政黨とを化合和一せしめずんば、以て平和に圓滿に其目的を達する能わずと頓悟達觀したるものありしは、蓋し亦疑ふべからず。

陸奥、伊東、皇等は姑く置き、此の如き時代に於て、彼れの亦最も適當したる一人なりしか、殆ど言はずして明なるものあるに非ずや。

當面の大問題は藩閥打破に在り、而して其藩閥打破も側面攻擊の手段に出でざるべからず、此問題は憲法政治を大成するを得るや否やの大問題にして、外交問題よりも重し、財政問題よりも重し、而も

此問題は、演壇の雄辯を以て解決すべきに非ず、組織的の學問を以て解決すべきに非ず、政府と議院と堂々の陣を以て解決すべきに非ず、必ずや密室中の坐談に依らざるべからず、而して其局に當るものは、固より術策權謀なかるべからず、彼れは是點に於て策士といふ、彼れは策士の名を甘受せざるべからず、毀譽を度外に置き、衆愚の紛紜に頓著すべからず、彼れ是點に於て、老壯士といふ、老壯士と呼ばれて首肯する、亦以なきに非ず、彼れは何事か目論む、彼れ不穩の精神あり、一旦目論む、必ず百難を排して勇進邁往す、彼れ頗る大膽なる仕事師なり、彼れが政府と交渉する方て、「宜しい引受けました」と斷言するや、彼れ眼中には最早政府なく政黨なく反對黨なし、嘗て王師に從ひ、會津に征戰し、矢石を侵し、彈丸を凌き、幾回か死生の途に出入したるの男兒、我れをして亂世に生れし

めば、少くとも十萬石の大名に爲りし男兒、眼に普佛戰爭を見たる男兒、嘗て政府顚覆の陰謀の主動者たりし男兒、必ず遺り附け得らるゝ處までは遺り附け、以て知己を後世に待つべしとの意氣當るべからざりしものありしを想見するに足る、彼れ謀叛骨あり、眞逆の時には、生命を投げ出すの覺悟あり、其老壯士を以つて居るは偶然ならず、然れども彼れ座談に長じ、人を說破するに長じ、縱橫の略を弄して、夜中と雖も、奔走するを辭せざるは、亦古策士の風なしと謂ふべからず、最近十年、樂屋の中にて働きたる彼れは老壯士を以て、古策士の事を行ひたるものなり、謂ふを休めよ、彼れは變則の立憲政治家なりと、藩閥打破の金鵄勳章は、彼れ固より之を受領するの大功あり、自由黨の歷史に於て、憲法政治大成史に於て、磨滅すべからざる一人物に非ずして何ぞ。

金子堅太郎

世に若し「舶來の和製」とも稱すべき人物ありとせば、金子男爵い即ち其一人に非ずして何ぞ。

吾人い先づ「舶來の和製」てふ新文字に向て註釋を加へざるべからず鐵道電信い言ふまでもなく、舶來品なり、然れども我國の鐵道電信の如くに脆弱なるものいなし、濃尾の震災は、絶えて無くして僅に存るものなり、之が爲に鐵道電信の一時破壞斷絶するは、蓋し避くべからざる天爲となすを得べしと雖も、我國にして古來二八月と唱へて、此季節には風雨の襲來すると、決して珍しからず、是れ無智蒙昧なる百姓の望で毫も驚かざる所にして、文明の技師に依り、學術的の設計に依り、國庫の資財を糜し、舶來の材料を以て、敷設せ

られたる鐵道電信の破壞せられ、斷絶せられ、不通と爲り、無用と爲る所あり、歐米の鐵道電信、決して此の如くあらず、獨り我國の鐵道電信に於て之を見る、「船來の和製」「てふの新形容語の廣く世に行はれ來りたる所以なり。

金子男爵は「能辨家」なり、而も「船來の和製的能辨家」なり、故山田顯義伯、男爵の演說を謹聽し、唱然として嘆美して曰く「余は生れて未だ金子の如き能辨を聽きたるとなし、彼れは實に能辨家なり」と、以て彼れの能辨家たるを知るべし、男爵は其演說する際に於て、其人物の市價を暴騰せしむ、男爵の演說に於ける作用は、日本銀行が制限外兌換券を發行するの作用なり、男爵は整然たる態度を以て、朗然たる音吐を以て、秩序的に、組織的に、演說す、抑揚もあり、波瀾もあり、擒縱もあり、頓挫もあり、冒頭もあり、歸結もあり、一絲紊れず、法度は嚴正、辭氣は沈著、論理は明徹、事實は精覈、綱張り、目擧がり、緒を尋ね、緒を追ひ、微よりして精、精よりして細、入而玲瓏、徹底せざるはなく、大珠小珠の玉盤に旋轉して、窮極なきが如く、圓轉自在妙眞に言ふべからず、明霞の空に曳搖するが如く、百花の風に飛舞するが如く、海上の蜃樓の如く、氣中の彩霓の如きものあり、聽くもの悉く恍然として神魂飛越す、能辨家に非ずして何ぞ、男爵の演說を井上角五郎、尾崎行雄、島田三郎等に比すれば、角五、行雄、三郎は到底和製なり、竟ひに男爵の船來たるに若かず、角五の詭辯も、行雄の辛竦なる辯も、演說機械たる三郎の堅板に水も、男爵の船來演說に對しては、信に顏色なきあり、然りと雖ども、男爵の演說には、深遠博大なる識量なく、光怪陸離たる情火あく、長江大河一瀉万里の趣なく、大膽不敵の硬

語なく、嘲罵あく、機趣あく、滑稽あく、笑謔なく、熱時人を熱殺する能はず、寒時人を寒殺する能はず、男爵は唯エキスポヲションに長ずるも、エキスプレッションに至ては、既に其長ずる所に非ず男爵は唯說明すべし、唯解釋すべし、唯講演すべし、男爵の演說は品川灣の怒波と鬪ふべし、以て相灘の波濤に當るべからず、男爵は從順ある學生の前に於て演說すべし、屬僚の前に於て演說すべし、立憲政友會の無事の日に於て演說すべし、其多事の日に於て演說すべからず、貴族院に於て演說すべし、衆議院に於て演說すべからず男爵の演說は舶來品に相違あかるべし、其舶來品たるや、猶鐵道電信の舶來品たるが如し、然れども我國の鐵道電信が、舶來の和製にして、不時の天災に耐へざるのみならず、定時の風雨にも、破壞斷絶を免れざるが如く、男爵の演說も亦多少此憾あり、是れ男爵の能

辯ぞ「舶來の和製」てふ世評ある所以なる歟、男爵豈純和製の百姓的演說家に學ふべきものあしとせんや。

男爵は小心翼々家たり、夫れ青天白日的の節義は、暗室屋漏の中より培ひ來り、旋乾轉坤的の經綸は、臨深履薄の處より操り出す、吾人は男爵の戰競の心あるを嫌はず、聞く男爵の伊藤侯に從ふ十餘年唯々として、未だ曾て逆はずと、以て其心を用ゐるの至細なるを見るべし、一代の雄才却て小心、其小心ある處よりして、雄才を認めざるべからず、大行は細瑾を顧みざる的東洋豪傑は、男爵の取らざる所なり、然れども、世人は男爵の用心至細なるを知る、臨深履薄の心あるを知る、未だ青天白日的の節義あるを聞かず、未だ旋乾轉坤的の經綸あるを聞かず、未だ著眼の高くして、能く大局を觀るや否やを知らず、兒女の情多くして、英雄の氣少く、文明の國家人た

る細愼謹密ありて、其雄大强毅の處あるや否やを知らず、「舶來の和製的小心家」と倣すゝ、男爵の爲よ、深く惜むべしと爲す。

男爵ハ博覽にして多能なり、ハーバアート大學の法學博士たり、前農商務大臣たり、男爵の精通するものは、公法學あり、憲法を起草するに、最も與りて力ありたるものを井上毅なりとせば、議院法を起草するに、最も與りて力ありたるものは伊東巳代治にして、撰擧法(舊法)を起草するに最も與りて力あるものゝ即ち男爵なり、然れども男爵は啻に公法に通ずるのみならず、商工の事に精通せ、其統計に綿密なる、其調査に周到なる、實要領を攫む、其歸納の正確なる、其演繹の自在なる、其能く商工の世界及び帝國に於ける趨勢氣運を解する、農商務大臣たるに負かずと謂ふべし、男爵の學藝に於けるインテレストは相應に廣く、自ら溪水と號し、其文學歴史等を

愛好する、少くとも溪川の水位の分量は之あり、下手八庚詩も亦之を能くす、然れども彼れは國家人として、果して其隻手を以て、幾多の蓁莽荆棘を排し、其信ずる所を實行するを得る乎、男爵の博覽多能は、文明的國家人たるの素ありと謂ふべきも、未だ秘書官的臭味を脱する能はず、竟に此點に於ても「舶來の和製」たるを免れざる所以なる歟、昔人いふ、江湖に涉るもの、然る後に波濤の洶湧を知る、山嶽に登るもの、然る後に蹊徑の崎嶇を知ると、男爵は伊藤侯の大翼に包まれて今日に至れり、官海の波濤を知るのみ、官途の蹊徑を知るのみ、未だ江湖の波濤の如何に洶湧なるかを知らず、未だ山嶽の蹊徑の如何に崎嶇なるかを知らざるなり、男爵の立憲政友會の創立委員として、未だ幾何ならざるに、早くも幾多の道聽塗說を生じたるは、獨り男爵の細故を記臆するゝ爲のみならず、釋氏の

所謂隨緣あるものか、是れ渡海的の浮囊あるを解せずして、茫々たる世路に向て、遑々乎として一念至きを求め、萬緒則ち紛起したるものゝみ、謂ふ勿れ、男爵はペダンチックにして、博覽を裝ひ、多能を誇り、其學ばるざるものまでも、學びたるごの如くに見せ懸くと、謂ふ勿れ、男爵は虛榮を好むと、謂ふ勿れ、男爵は「文明の蛆蟲」たる高襟者流の臭味を脫し盡くさずと、世人の此の如くに、男爵を見て、「舶來の和製」と倣すは、適ま男爵が未頼むべき男爵たり、法學博士たり、前大臣たるを證するものに非ずして何ぞ。

男爵は決して融通の利かぬ男に非ず、伊藤宗の洗禮を受けたるだけに、多少機を捉ふるの明あり、多少氣合を見るの智あり、啻に計畫を立つるのみならず、多少其計畫を實行するの掛引あり、立憲政友會員として、十年國民的大勢力の潮風に吹かれて、人を陶鎔するを知り、其學問に工力透り、沈毅の識を生じ、卓越の見を生じ、慷慨の節を生じ、質實の心を生じ、野蠻的百姓的の氣象骨力を生じ、定時の風雨のみならず、不時の天災にも耐ゆる「舶來の舶來」的國家人たるを得べきもの、我れ獨り斯人を推す矣、之を要するに「金子」の「金」は既にあり唯「純金」なるを嫌ふ「堅太郎」の「堅」を加ふれば、則ち十全。

松田正久

卒然として大問題起り、一黨の人、盡く倉皇狼狽、錯愕顛倒、驚魂動魄、喪神失明するに方て、冷々然落々乎として、毫も色を動かさず、「さう騒いだ所で仕方がない、今に何んとかありませう」といひ熱沸して湯氣昇騰せんとする群頭顱に、一片の氷塊を投じ、瞬息の間、赤道直下の熱天爍地に、北極の氷山雪海を湧出するの魔術師ありとせば、蓋し松田正久氏は其の一人なり。

彼れは唯此一點に於て、魔術師のみ、彼れ極めて清なり、決して濁あらず、彼れは極めて靜なり、決して躁ならず、彼れは極めて閑なり、決して忙あらず、彼れは極めて實なり、決して幻ならず、彼れは重にして輕あらず、沈にして浮ならず、厚にして薄ならず、寂に

して、喧ならず、常に身を清涼臺上に安置す、黨人の中に在るや、彼れは「香爐上一點の雪」なり。

彼れは同じく九州男兒なり、同じく佐賀縣人(但し小城藩)なりと雖も、大隈伯等と全く其性情行逕を異にす、伯等は智を恃む、彼れは節を守る、伯等は變を喜ぶ、彼れは理を尚ぶ、伯等は奇に出づ、彼れは正を執て渝らず、其出處進退の同じかるべくして、而して全く異あるは、一は固より身世の遭遇に由ると雖も、抑も亦其性情行徑の先天的相反するの然らしむる所、意ふに大隈伯は必ず幾回か彼れを其幕下に羅致せんとしたるあるべし、而して其竟に羅致する能はざりしもの、大隈伯の造りたる改進黨と自由黨の其黨性を異にし、到底化學的に和合する能はざるが如し、彼れは眞に自由黨的なり。

彼れは其天資に於て、自由黨的なるのみならず、其學問修養に於て

も、自由黨的なり、若し改進黨を以て、嘗て英國的なりしとせば、自由黨は實は佛蘭西的なりしなり、而して彼れは實に佛蘭西仕込の經國家なり、彼れは明治四年、陸軍の裁判官として、佛國に留學し專ら法律を研究し、佛國に在ること足掛六年、明治九年を以て歸朝せり。

彼の天資清にして靜、閑にして實、重にして沈、厚にして寂、既に法律的なり、既に論理的なり、而して之に加ふるに裁判官たり、法律學者たり、其全身盡く法律的論理的なるが如きは、蓋し之が爲のみ、只夫れ法律的なり、論理的なり、故に彼れは常に身を清涼臺上に置くも、多くの談味を有せず、多くの詩情を有せず、閑雲野鶴の態なく、石澗流泉の趣なく、沙鷗麋鹿を侶として、機心頓に忘るゝの處なきも、亦實に之が爲のみ、故に彼を視ては、必ずしも超絶の

想を起さず、必ずしも澡雪の思を動かさず、彼れは決して彼の白雲に從て帝鄉に遊ばんと歌ふものに非ず、世を捨てゝ山に入るものゝ非ず、彼れは到底世間的なり。

彼れは既に世間的なり、而して其世に立つや、論理的、法律的の頭腦を以てす、而も之に加ふるに清、靜、閑、實、重、沈、厚、寂の資質を以てするに於て、彼れを先天的の裁判官なりといふは、決して偶然ならず、彼れをして若し長く裁判官たらしめしならば、彼れは今日に於ては、既に大審院長たりしあるべし、控訴院長は固より保險附なりと謂いざるべからず、然るに彼れは身を屈して裁判官たるを願はず、山田顯義の慰諭をも聽かずして、佛國より歸朝後、未だ若干ならずして、飄然として身を民間に投じたるは何ぞ。

彼れは飽くまで法律的なり、論理的なりと雖も、彼れは眞男兒の硬

骨を有す、鐵石の剛腸を有す、彼れを刺す最利に湧き出づるものは冷、氷の如き水あり最後に迸り出づるものは熱血なり、彼れ裁判官たり冷、氷の如き資質は滿足すべし、然れども其心臟を鼓動する熱血は、到底滿足すべからず、是れ彼れの裁判官を以て甘んずる能はざりし所以あり、彼れは確に氷雪に包まれたる火山あり、彼れは佛蘭西の論理あり、佛蘭西の熱血あり、唯佛蘭西のクーデター的性情なきのみ。

彼れの佛國に在るや、西園寺公望、山田顯義、中江篤介、光妙寺三郎と友とし善し、故ゐ彼れの民間に下るや、中江篤介と相圖りて、西園寺公望を說き、遂ゐ世人の記臆に尙新なる東洋自由新聞を創立し、盛に佛蘭西流儀の自由民權を主張したり、東洋自由新聞ハ、實に彼れの其氷雪を排して、煙烟の天を衝きたる最初の噴火口なりし

なり、人或は自由黨員の經營に成れる新聞紙の常に中廢するに反し改進黨の新聞紙か繁昌するの理由を解するゐ苦む、然れども是れ決してスヒンクスの謎には非ず、答は是れなり、自由黨員は主張を貫く一點張りを以て、新聞を經營し、毫も營業の何物たるを知らず、之に反して改進黨は如才なく商賣し、商賣の爲とならば、時として親分の頭に鐵拳を加ふるを辭せざるを以てゐり。

彼れは商賣を知らぬ自由黨中に在て、最も商賣を知らぬものなり、其商賣を知らぬ一點は、新參者の尾崎行雄と弟たり難し、又兄たり難し、彼れは常に清貧を守る、彼れハ政黨のアパヅレ者の濡手で粟を攫むの妙手段を解せず、彼れは經濟學の原則を眞面目に遵奉す、曰く「報酬は勤勞と相伴ふものなり」彼れは嘗て大藏省、外務省、陸軍省の飜譯を引受けて、糊口したるとあり、明治二十年の頃、眼

疾を患ひ、復た醜譯に從ふ能はざるに至れり、彼れは是時に於て、
寢て喰ふの手段を發見する能はず、司法大臣山田顯義之を聞き、彼
れを再び裁判官に命じ、大坂に在勤せしめたり、後、文部大臣森有
禮の懇望に依り、鹿兒島造士館の經營に任じたり、然れども彼れの
性情は長く裁判官たるべからず、長く學校の教授先生たるべから
ず、故鄕の有志が彼れを促すや、之に應じて、身を撰擧場裡に投じ
更に政黨的生涯に投じ、遂に嘗て長崎縣會議長たりし彼れは、大隈
板垣内閣の大藏大臣と爲り、其の貪らざる純潔の手腕と、其法律的
論理的なる頭惱を國家財政の上に應用したり、在職日短く、赫々の
功あしと雖も、其大過あかりしは、彼れに於て固より怪むに足らず
凡そ一旦大臣と爲るや、野に下りたる後に於て、昔の舊巢に入るは
何人も何とおく位を下げるが如くに感ず、彼れは麻布の草屋より出

でゝ、大藏大臣と爲り、大藏大臣を辭するや、平然官邸を出でゝ復
た環堵蕭然たる麻布の舊巢に入る、彼れの清貧自ら守るは、洵に滔
々乎として、奢侈を競ふの世に在て、誰か欽仰すべからずとせんや。
伊藤侯嘗て曰く、其人物を詳にせば、彼れが如何なる場合に如何な
る言動に出づべき乎、千万里の外に在るも、之を測るに難からずと
過去十年、政海の狂瀾怒濤を捲いて、一世の耳目を昏迷せしむるや
彼れも亦あらぬ浮名を被ふれり、然れども記者の多少其人を知るに
於て、常に以て然らずと爲せり、既に經國家として立つ、無論懸引
あるべし、然れども彼れは飽くまで法律的論理的あり、條理の是認
したるものに非ずんば、動かず、寧ろ動く能はず、一度條理の是認
したるものは、其鐵石の如き剛腸を以て遂行せんとす、然れども更
に他の新なる條理を發見し、條理政略竝び可なるものあるに會せば

飜然として之と改むるに躊躇せず、故に過去十年彼れの行動、万一宜しきを得ざるものありとするも、其操守を疑ふべきものは、断じて一も之あらず、彼れは今や新黨の創立委員たり、吾人は長く彼れが新黨一方の雄鎮たらんことを望む、顧ふに新黨の前途は、直に風恬浪靜を期すべからず、自由黨の早り男血性兒を寄からぬとあれば、彼れが「さう騒いだ所が仕方のない、今に何とかありませう」百度以上の熱頭に氷點以下の冷語をアビせかくるを待つの必要、蓋し一二回にして止らざるべし、吾人は深く彼れに期する所あるなり。

（三十二年九月）

近衛篤麿

近衛公爵に取る所は、有爲の志、鬱勃たるに在り、公爵は死せる噴火山に非ずして、活ける噴火山なり、其噴火山たるや、磐梯山、吾妻山、硫黄山の如き、一時に爆發破裂し、一世をして魂動魄せしむるに非ず寧ろ淺間山の如く、孤煙絶えず直上して、漸く長空に搖曳するの觀を做す、公爵は尚春秋に富む、前途寔に遠しと謂ふべし

世には其性格稟質、全く相異りて、而して竝び稱せらるゝものあり尾崎行雄と犬養毅との如き、西園寺侯爵と公爵との如き即ち是れ。西園寺侯爵は聰明無比なり、聰明無比なる人物の病は、第一に無頓着なるに在り、第二に懶怠なるに在り、事を議するものは、身、事外に在るべし、事を行ふものは、身事中に在るべし、侯爵は餘りに

能く利害の情を悉くす、必ずしも一々事に與り局に當るを待たず、故に始めより熱中の人たる能はず、知るべし、侯爵の長所は即ち侯爵の短處にして、侯爵絶代の聰明は、反て侯爵をして事に無頓着ならしめ、物に懶怠ならしむ、侯爵は識見經綸に於ては、第一流の經國家たり、其力量手腕に至ては、果して能く之に副ふや否や、侯爵は政黨の憲法政治に於ける關繫を解す、伊藤侯をして立憲政友會を組織するに至らしめたる、侯爵の力與りて少しとせず、侯爵今や身親く政友會員たり、其假總務委員たり、侯爵は事實に於て黨人たり然れども侯爵は黨派の領袖としては、餘りに俗ならず、餘りに高風標なり、所謂策士や野武士然たる議員と群するに耐へず。

公爵は侯爵の聰明なし、若し聰明の一點に於て、公侯を並稱するものあらば、比倫を失する、世是れより甚しきはなかるべし、公爵は

聰明の一點に於ては、尚餓鬼なり、小供なり、腕白小僧なり、公侯の相距る、何ぞ啻に三十里のみならんや、然りと雖も公爵に取るべきは、公爵の早熟的ならずして、晩熟的なると是れあり、公爵は決して瓦礫に非ず、榜樫に非ず、公爵は稽鑛物の如し、金分頗る多しと雖も、土砂を相混ずるを奈何せん、公爵の經國家的力量才幹は最緩の速力を以て開發す、吾人は公爵が過故に於ける行動を一々點檢するに暇なしと雖も、公爵を知るものは、常に必ず多少の進歩發達あるを看取すべし、即ち今日の公爵は、昨日の公爵に非ず、明日の公爵は、又必ず今日の公爵に非ざらんとす、閲歴經驗、若し能く公爵を鎔鑄するを得ば、其醇乎として醇なるの境に臻るは、必ずしも期し難きに非ず、蓋し公爵は大器晩成なり、今日に於て多きを公爵に求むるは、卵に向て時夜を求むるの類のみ。

然り今日に於て、多きを公爵に求むるの類なりと雖も、公爵の大志は、處々其鋒鋩を露呈し、欺くべからざるものあり、先づ公爵と伊藤侯爵との關係を見るべし、公爵の侯爵に對する師父の誼ありとは、公爵の常に明言するを恥ぢざる所、而して第五議會の解散せらるゝや、公爵は時の内閣總理大臣たる侯爵に痛切なる一篇の忠告書を贈りて、其反省を求めたり、今回の國民同盟會に在ても、亦侯爵と正反對の位置に立つを辭せず、其動機の安くに在るやを問はず、少くとも侯爵と相持して下らざらんとするの意氣地のある、太だ愛すべきに非ずや、公爵は動もすれば黨人に利用せられて「樽神輿」と爲る、去れど公爵は必ずしも「樽神輿」を以て甘心するものに非ず、凡そ公爵の如く門閥あるものゝ、常に多少「樽神輿」にせらるゝの覺悟なかるべからず、公爵は「樽神輿」に

せられつゝ、漸くに常に「樽神輿」たる權利を掌握す「樽神輿」たるの權利を掌握す、是れ決して專ら「樽神輿」たらざるなり、公爵は夙に帝國の貴族社會を改革せんとするの志あり、公爵の當に身を以て、貴族の矜式儀範たらんとするのみならず、自家の理想とする文明的の新貴族を鑄らんとす、公爵の學習院長たるは決して閑職に居るの心に非ず、其心は猶吉田松蔭の松下村塾に於る、福澤諭吉の慶應義塾に於るが如きなり、公爵が客歳世界を漫遊したるゝ、貴族教育の取調を第一の目的とし、傍ら政治上の觀察に及びたり、公爵は現代の貴族を收容したる貴族院に議長たり、而して第二の貴族を造る學習院に長たり、公爵は今日貴族社會に於ても亦「樽神輿」たるの意味を免れざるべしと雖も、公爵は黨人群政治家の間に在て、專ら「樽神輿」を以て甘心するものに非ざるが如く、貴族社會に在

ても亦固より然り。

吾人が公爵に取る所は、其獨逸學の深きに非ず、其國家論に非ず、其獨逸大學に在るや、卒業論文として、責任內閣論を草したるに非ず、明治評論の議論に非ず、其保守的傾向あると是れあり、吾人は高襟者流の文明論を厭ふ、渠輩の文明論は眞にスキンヂーブのみ、其言語擧止の捷快なる鳥雀の枝より枝に飛び度るが如く、蝴蝶の花より花に舞ひ移るが如し、手サワリは如何にも善きも、人其輕薄に耐へざらんとす、公爵保守的傾向を以て、文明進歩の事業を行ふ遲しと雖も、著實なるを失はず、其己れを利し、他を利する、此れ却て彼れに勝るものあらんとす、公爵は流石に謹愼なるが如し、忠忱篤敬なるが如し、而して其意志決して薄弱ならず、信ずる所に篤く守る所に堅きは、其行動之を證して餘りあり、公爵は西園寺侯爵の

聰明なし、其聰明なきは偶々自ら幸して、公爵をして無頓着怠なる能はざらしめ、或點に於ては、實に熱中の人たらしめたり、熱中の人は導いて道に入らしむべし、公爵の勢力は、(若し勢力と謂ふを得べ)既に一般の政治社會に及び、既に貴族社會に及び、而して皇上深く望を公爵の前途に屬せしめ給ひ、備に愛護せらると、侯爵請ふ自愛自重して、以て大器を他日に成すべし。(三十二年十月)

片岡健吉

自由黨に片岡健吉氏あるい、適ま以て自由黨の猶剛健正大の氣に富むを證するものあり、進歩黨や藩閥政府の地味にて い、到底此種の人物を成長せしむる能はず、進歩黨や藩閥政府の空氣にて い、到底斯種の人物を呼吸せしむる能いず。

土佐は二個正反對の人物あり、板垣伯の左右に在て、伯をして其一生に大過あからしめたり、一い林有造、一い片岡健吉。

林い古壯士を以て、古策士の事を行ふ、彼れい謀叛骨あり、クーデターも敢て之を行ふを辭せず、彼れを亂世に生れしめば、少くとも十万石の大名と爲りしあらん、然るに彼れい太平の世に處して、胸中縱横の奇策を行ふ能はず、十年西南の變に際し、クーデターを仕

組みたるも、事虛しく露はれ、身い縲絏に繫がれ、沮洳の場を以て安樂の國と爲さゞるを得ざるに至れり、彼れの獄を出づるや、間もなく憲法政治の時代に入り、最も得意あらざる時代に處して、最も得意あらざる事を行へり、而かも彼れが自由黨中の大立物として、内外幾多の敵を引受けあがらも、縱横の手腕を揮ひたるを見れば、彼れの前生涯の傳記の必ずや一讀案を拍て快矣とすべきものあらん然り彼の前生涯い、確に憲奇的あり、吾人い他日林氏及び彼れの故舊に就き、其詳あるものを讀者に示すの期あるべきを信ず。

片岡に至てい、全く之に反す、彼れい奇策を行ふて、奇功を收めんとするものに非ず、隱謀を好まず、詭辯を弄せず、遊說に長ぜず、運動を能事とせず、彼れの心事い天靑く日白く、彼れい作用極めて安詳にして、夢寐神魂も和氣に非ざるはなく、聲音笑語の末に至る

まで、些の殺氣なし、蓋し其篤敬深信、天を敬し人を愛し、心体總て光明にして、暗室の中に青天あるの吉人なり眞人なり、其世に渉るや、亂世に於ても、治世に於ても、常に中庸の道を濶歩し、誠心以て自然に人を感動し、和氣以て自然に人を薫蒸し、名義氣節以て自然に人を激勵し、必ず最後の勝利を收む、之を約言すれば、彼れ一實に「正を踏んで懼るゝ勿れ」の格言を躬行實踐するの人物なり。

吾人一是れより少しく彼の人物を論ぜんするに方り、先づ其履歷を記載すべし、彼れ一高知縣の士族にして、天保十四年、十二月二十六日、土佐藩高知中島町に生れたり、彼れの履歷を詳にするに、彼の人物を解釋する階梯なり。

一　文久三年二月土佐、吾川、長岡三郡の奉行に任ぜられ專ら海防の事を司る尋で足輕又一士族隊長と爲る

一　明治元年東征の役起るに際し藩兵の大軍監を以て參謀となり東山道より進み各所に轉戰し九日若松城陷り十月土佐に凱旋す軍功により格式中老に進められ賞典祿二百石を賜る

一　明治元年十一月藩の軍務局參謀となる

一　明治二年十月薩、長、土、三藩兵を獻じて御親兵となすの擧あるに際し權大參事となり藩主の命を受け諸隊を統率して上京し練兵を天覽に供ふ

一　明治四年四月太政官より海外視察を命ぜられ米國を經て英國に入り龍動に滯留すること一年巴里を經て六年一月歸朝す

一　明治六年十月式部寮に於て海軍中佐に任ぜられ水兵本部課長心得を命ぜらる

一　明治七年一月二十七日征韓論破裂の結果退官す

一 明治七年四月高知に立志社を設立し撰ばれて社長となる
一 明治十年六月立志者總代となり民撰議院開設の建白書を京都行在所に捧呈す
一 明治十年西南の亂に連坐し翌十一年八月禁錮百日の刑に處せらる
一 明治十二年四月縣會開設に際し土佐郡より擧られて議員となり土阿兩國高知縣會議長となる
一 明治十三年三月立志社總代として大坂に開きし愛國社大會に臨み議長となり會の決議により國會開設請願書捧呈委員となり同年四月大政官に出頭し願望書を捧呈す
一 明治十四年十月同志者と相計り自由黨を組織す
一 明治二十年十月三大事件建白の爲高知縣民總代となり上京中

同年十二月保安條例によりて東京退去の命を受け聽かずして輕禁錮二年六月に處せらる
一 明治二十二年二月大赦に會ふて出獄す
一 明治二十三年七月國會の開かるゝに際し高知縣第二區より撰出せられて衆議院議員となる爾來數回の撰擧を經るも常に議員に當撰し今日迄繼續せり
一 明治二十六年十一月第五議會開かるゝに及び全院委員長に當撰す
一 明治二十七年五月第六議會開かるゝに及び副議長に當撰す
一 明治三十一年五月第十二議會開かるゝに及び議長に當撰す
一 明治三十一年十一月第十三議會開かるゝに及び再び議長に當撰す

吾人が常に維新の風雲に際會し、幾回か死生の途に出入して、風波に頓頓し、險阻を備嘗し來りたるものに對して、及ぶべからずと爲すものゝ、其自然に得たる鍛練あり、其自然に得たる膽氣骨力なり其大事に臨で、從容迫らず蠶かざるの風なり、彼れの及ぶべからざる亦此一點に在り、彼れは腰間に双刀を横へて、足輕及び士族隊長と爲り、明治元年、藩兵の大軍監を以て、東征の役に從ひ、板垣伯と共に、會津を攻めて之を陷れたり、彼れは武士道的の素養ある人物たるや知るべし、彼れは明治六年、海軍中佐に任ぜられたり、一面に於ては、陸軍の士官たり、一面に於ては、海軍の士官たり、是れ必ずしも彼れが一身にチルソンとマールボルユとを兼ねたる海陸兼備の將軍たるを意味するに非ずして、寧ろ西鄕侯樺山伯の海軍に於けるが如きものなりしやも、未だ知るべからず、然れども維新草

創の際に在ては、其職に任ぜられて、始めて其職に必要なる學藝を修養したるもの寡からず、獨り彼れに於て異むべきゝ非ざるなり、問ふを休めよ、彼れの兵事上に於ける智識如何と、彼れは所謂武士道的の素養ある人物にして、若し所謂武士道をして大和魂ならしめば、彼は實に大和魂ある人物なるや知るべし。

然れども若し彼れをして武士道大和魂一本槍の人たらしめしならば彼れは唯一個の律義者頑固親爺のみ、彼れは洋書を讀まずと雖も、早く明治四年四月を以て、歐米に官遊し、泰西日將月就の文明の新空氣を呼吸して歸れり、此遊果して幾許の感化を彼れに與へたるを知らずと雖も、彼れは是れより先き、既に泰西の兵學に於て、多少自得する所あり、彼れの此遊それ必ずや苟も泰西列國と連鑣馳騁せんと欲すれば、先づ列國を師とせざるべからず、世界を師とする

の雅量ありて、始めて世界の師と爲るを得べしと開悟せしめたるなるべし、彼れが巴里を經て其故國に上陸するや、復た故吾に非ず、復た二年以前の片岡健吉に非ずして、武士道を洗煉するに泰西文明を以てしたる片岡健吉なりしなり。

彼れの征韓論破裂の際、海軍軍籍を脱して鄉に歸り、自由民權の搖籃たる立志社を設立したり、今日に至りて征韓論の是非を論じて、當時の英雄を論定するは、寧ろ酷なるを免れず、然れども苟も眼泰西の文明を視たるものは、我國が未だ事を外に起すの時機に非ざるを了せざるの理なし、征韓論者の志は、二十七八年役に於て、纔に始めて行はれたり、西鄉等の征韓論は、少くとも二十年早かりしといふも過言あらず、彼れの眞意の安くに在りしかは、今之を臆測するを許さずと雖も、彼れは明治十年、西南の戰方に酣なるに方て、

彼れは其友人が西鄉等と相應じて、叛を謀らんとするにも拘らず、立志社總代として、京都の行在所に向て、民撰議院開設の建白書を捧呈せり、以て彼れが自由と爆烈彈と、民權と謀叛と、四民平等と外國侵略との區別を解せざる腕力理窟を混同せる民權家に非ざりしや知べきのみ、是れ豈彼が泰西官遊の効なりと謂はざるべけんや」

彼れの基督教を信ずるや、天下之を知る、基督教を解せずして、歐州の文明を解せんとするは、猶舊約聖書を解せずして、英國及び歐州大陸の文字を解せんとするが如し、吾人は實に其の難きを知る、彼れの基督教は果して神人一和、万國同歸の靈境に臻達したるや否やを知らず、意ふに彼れの基督教ゐ於ける、哲學者ゐ哲學を講ずるが如くに、冷頭、冷心、而して蒼白顏を以て學ぶに非ず、彼れは基督教を篤信するものなり、彼れは熱誠の人として生れたり、言、忠

信、行、篤敬の人として生れたり、基督教い即ち此熱誠、忠信、篤敬の心に投じて、其終生渝らざるの信仰と爲れり、明治の新進にして、基督教を學ぶもの寡からず、而して其多數は柔性的基督教徒と爲れり、野蠻の元氣銷磨し盡きて、唯家庭の愛すべく、婦人の愛すべきを知り、リヴィングストーン的勇進邁往の氣象に至て、則ち全く見るべからず、彼れの基督教は則ち然らず、彼れは武士道と基督教と其歸を一にすべきを覺れり、彼れは武士道の素養に調和するに基督教の愛を以てせり、正義を以てせり、精神を以てせり、ソ[illegible]モン曰く、上帝を識るは智慧の始めなりと、彼れの泰西の學術、若し之ありとせば、至竟飜譯的のみ、然れども基督教を解せずんば、歐州の文明を解すべからず、彼れは基督教を解し、基督教を信じ、時あつて神融意會の處に至れば、手の舞ひ足の踏むを知らず、彼れは

確に泰西文明の神髓に觸れたるものなり。

彼れは既に武士道的なり、基督教的なり、眞心極めて熾にして、些毫も人を害せず、人を忌まず、人を猜疑せず、人を嫉妬するなきと同時に、甘んじて他の迫害を受くる能はず、自ら省みて疚しからずんば、千萬人と雖も、恐るゝ所に非ず、刀鋸鼎鑊と雖も、辭する所よ非ず、是を以て彼れが明治二十年十二月、保安條例に依りて、東京退去を命ぜらるゝや、一卷の聖書と其武士道とは、罪なからざる罪に屈伏するの男兒の恥辱たるを敎へ、頑として命に應せず、遂に石川島監獄に投ぜられ、二年六月間、配所の月を眺めたり、彼れ豈命に應じて謹て東京を退去するとと、二年六月の輕禁錮に處せらるゝとゝ孰れか易、孰れか難、孰れか逸、孰れか勞なるの打算なからんや、唯彼れは其一片耿々たるものを欺く能はざるのみ、聖書の手前、武

士道の手前、難を捨てゝ易に就き、勞を去て逸を取る能はざるのみ斯心以て古の殉道者に恥ぢずといふべし。

彼れは田口卯吉、植村正久、島田三郎の如くインテリゼント（聰明）ならず、然れども彼等の如くインヂフエレント（無頓著）なる能はず何ぞ況やインドレント（懶怠）あるに於てをや、何となれば彼れゝ熱誠の人ゐ過ぎたるものあるを以てなり、彼れは決して我れは世界主義あり、國を立つるの價ゝ幾何ぞ、眼中嘗て黨派ゐしと放言して自ら安んずる能はず、彼れは熱誠以て其故郷を愛す、自由黨を愛す、國家を愛す、國家と故郷と其輕重大小は、彼れ固より之を知る、然れども其故郷を愛するの心も、自由黨を愛するの心も、國家を愛するの心も、決して二致なきを知る、其熱誠を注ぐゐ至ては、即ち一ならざるべからざるを知る。

自由黨過あらん乎、彼れゐ於ては是れ黨の過に非ずして、自家の過あり、彼れは故に黨に過ありとて、利害を算して、脫去する能はず過を已れに引き、以て黨を矯正せんと欲す、彼れは豈君子人に非ずや、吉人に非ずや、此心古人を相距る遠からずと謂ふべし、彼れの熱誠此の知し、彼れは常に衆の推戴する所と爲る、立志社の社長と爲り、高知縣會議長と爲り、愛國社大會の議長と爲り、衆議院に在ては全院委員長と爲り、再び議長とある、蓋し其熱誠にして敬天愛人の至情、自然に人を感動し、董蒸し、激勵するの致す所に非ずして何ぞや。

彼れの自由黨員たるは、自由黨を信ずるゐり、反言すれゞ反對黨を信ぜざるゐり、然れども彼れ一旦議長席に就くや、直に議長の職責の重きを信じ、「爾の敵を愛せよ」との聖言を實踐し來る、故に彼れ

は議長としては、極めて公平にして、反對黨も亦敢て其偏頗を鳴らす能はず、彼れの如く武士道と基督教を一致せしめたる人物の最も短とする所は、法律あり論理あり、彼れは議院の法規典則に通ずと謂ふべからず、而も心誠に之を求む中らずと雖も遠からず、其能く議長の職責を遂行して敢て凝滯あきは、只是れ心誠に之を求むるが爲のみ、若し夫れ議院一亘狂瀾怒濤を捲き、三百頭顱總起立と爲り田中正造は怒鳴り、門馬尙經は口を尖らし、中村背水は扼腕して椅子を蹴るや、法規典則に精通し、眞個の議長を以て任ずる鳩山和夫元田肇の輩、蒼皇出づる所を知らず、「休憩」を宣言し、闥を排して去るの外策あきに至ては、是れ彼れの最も得意ある場にして、武士道にて鍛錬したる膽氣と、基督教にして砥礪したる熱誠とは、瞬息の間、天には平和あり、地には榮光あらしむ、吾人は明治の新人物

新智識連、高襟黨一派の輩の此點に於て深く彼れに學ぶ所あらんとを望む、彼れは明治の新人物に於て、百及ばず、唯此一點、明治の新人物の遂に全く欲如せる所あるを知らずや。

聞く彼れはクロムウエル傳を愛誦すと、彼れは固よりクロムウエルに比すべき人物に非ず、クロムウエルは英國海軍の基礎を立てたるもの、彼れは唯海軍中佐のみ、彼れは身を武人に起すも、固よりクロムウエルの鐵腕あし、鐵騎を以て議會を蹂躙するの英雄に非ず帝王の頭を斷ずるの謀叛家に非ず、然れどもクロムウエルの剛毅朴訥は則ち之あり、クロムウエルの宗教的熱誠は則ち之あり、クロムウエルの宗教的信仰は則ち之あり、時の相去る三百年、地の相距る一万里、彼れも亦多少心契默會する所ある耶「正を踏で懼るゝ勿れ」の一語を以て、其一生を一貫したる斯人、幸に自ら珍重せよ。

（三十三年十月）

星亭

星亭の在る處、必ず生命あり、活動ありとは、彼れの朋友も、彼れの讐敵も、均しく承認するに躊躇せざる所なるべし、其自由黨に在るや然り、其衆議院に在るや然り、其東京市に在るや然り、而して彼れの活動は、感情の刺撃昂進より來らずして、鞏固なると鐵の如き意力より來る、故に彼れの活動は、忽ちにして冷なると水の如く忽ちにして熱すること火の如くならず、彼れの活動は、必ず幾多の負傷者を生ずるにも拘らず、而して已れ亦往々にして負傷するにも拘らず、其鞏固なる意力と我慢力とは、一たび勝場に臨めば、敵をして、獸奔禽遁せしめ、窮寇と雖も、亦敢て之を追ふことを辭せず、一たび敗局に處するも、決して蹉躓困倒に至らず、必ず敗局を一振

し、禍を轉じて福と爲すに至らずんば休せず、明治の新人物、才華爛熳、應接進退皆節に中るものの乏しからずと雖も、大抵薄志弱行の徒、是れ彼れの此間に立て、異彩といふ能はずんば、異色を放つ所以に非ずや。

彼れは意力と我慢力との權化なり、其剛腹にして人を人とも思はずと稱せらるゝもの、適ま其意力と我慢力との發達したるを見る、或は彼れを以て愛蘭のオーコンチルに比するものあり、オーコンチルは一種の鬪牛なり、雄辯劍の如く、口を開けば輙ち罵り、確然たる信仰と爛熳たる熱誠、亡國の雄將として政界に馳驅す、彼れは其鬪牛的技倆に於て相似たるものあるも、チーコンチルの如く、宗教的信仰なく、宗教的熱誠なし、彼れは極めて冷頭なり冷算あり、其少年爭氣の充溢

せし時代に在ては、爭鬪せんが爲に爭鬪したるとありとするも、彼れはヲーコンチルと其立場を異にす、勝敗の數を外にして唯故國の爲に氣焰を吐くと虹の如くあるの心要あらず、彼れは今日に於ては決して勝敗に關せずして、野猪的に猛進せず、其鬪ふの前に於てや必ず細に勝敗を打算す、人、彼れの演說會に於て、議院に於て、市會に於て鬪ふの餘りに露骨にして、殺風景にして、無趣味にして、而も倨傲不遜にして無遠慮なるが如くなるを見て、唯鬪はんが爲に鬪ふものありと傲すと雖も其露骨、殺風景、無趣味、倨傲不遜、無遠慮あるが如きは、一は其先天に出て、一は其年尙壯にして習練修養の未だ至らざるが爲のみ、一亘、勝算十分あらずして鬪ふも、彼れは万丈の氣焰を吐いて已むを以て、得意と爲すものに非ず、彼れの此際に苦心するは、唯如何にして敗局を轉じて、勝局たらしむるに在り、是れ彼れが人心を收攬するの術に於て、未だ盡くさゝる所あるにも拘らず、人をして信賴(レライエーブル)すべしと爲さしむる所以あり、彼れが議院の首領として、一頭地を拔く所以も亦豈此に存するに非ずや。

一新聞記者あり、嘗て彼れを罵て曰く、彼れは我輩に向て何事も語らず、偶々語るも要領を得ず、彼れは新聞を利用するの道を知らずと、彼れは極めて實際的なり、眼中常に個の標的を有す、彼れは唯此標的を射らんと欲す、彼れ此標的を射るが爲には、極めて大膽なり、小心なり、確實なり、適切なり、其力を注ぐと、獅子の兎を搏つも啻ならず、故に彼れは此標的を射るが爲には、演說も辭せず、新聞屋を相手にするも辭せず、新聞を利用するも辭せず、奔走も辭せず、衆客に接するも辭せず、政治は宗教に非ず、其手段も、時と

しては之を擇ぶに暇あらず、彼れは意力鐵の如く、我慢力石の如し何物も何人も、彼れをして叩頭拜脆せしむるに足らず、獨り彼れの從順あるは「必要」の前のみ、彼れは室内に在ては、非常ある讀書家あり、古今東西の書渉獵せざるはなし、然れども彼れは一歩戸外に出づれば、毫も讀書家の風なく、學者の態なし、人往々にして彼れは何の爲に讀書する乎、讀書して消化する乎を疑ふ、彼れを知らざるも亦甚しからずや、彼れは學者を以て居らず、讀書家として月給を貰はず、彼れは其志を行ふや、學術一本槍の能くする所に非ず學術の外、經國家の立場あるを了す、故に經國家の立場に於て、必要あるの外は、口毫も理窟を語らず、書齋的臭味を帶びず、反て他の學者、讀書家を氣取るを笑ふ、彼れ唯必要の前に從順なり、人或は彼れを壯士の親方といふ、必要あれば壯士の親方ともあるべし、

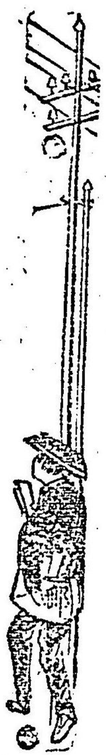
然れども彼れは壯士の親方以上の人物あり、人或は彼れを福の神崇拜といふ、必要あれば、福の神崇拜家ともあるべし、然れども彼れは神の神崇拜家以上あり、彼れは屈原に非ず、柳下惠に非ず、社會と共に濁るは、決して厭ふ所に非ず、然れども社會と濁るも、社會の爲に致されず、必ず復た其社會より拔け出づるの伎倆を具ふ、彼れは其眼中に逆と順とあし、唯其志を當世に行はんとするのみ、故に彼れは社會を離れ、時勢を離れて、敢て聖賢を學ばず、彼れの黨派を導くや、黨派の中に在て導く、社會を導くや、社會の中に在て導く、彼れは常に事の外に在らずして、事の中に在り、是れ彼れの飽くまで批評家に非ずして、實際家たる所以あり、彼れの言動、其當世に無類ある堅强ある意力、我慢力より來るが爲に、彼れの在る所、必ず求めざるに讐敵を生じて、排難攻擊、中傷誹謗の紛紜たる

を致すも、必ず何事か實際に可觸的の効果あり、但た彼れの餘りに實際的にして、其口も必要あるに非ずんば開かず、其手も必要あるに非ずんば擧げず、其足も必要あるに非ずんば投せざるが爲に一々胸中の閑日月は、未だ之あるを見るべからず、背際に中ると雖も、光風霽月の襟懐は、未だ之あるを見るべからず、有用を以て有用とするも、無用を以て、有用とし、必要を以つて必要とするも、不必要を以て必要とするの餘裕は、未だ之あるを見るべからず、横濱埋立事件の嚢々たるや、江原素六翁記者に謂て曰く「星は意思の極めて鞏固なる男なり、一難ある毎に必ず人物を修錬して來る、其進境未だ遽に測るべからず」と、西人は六十年を以て中年と爲す、彼れの政治的年齢は、尚一少年たるを失はず、其進境測るべからずとせば、彼れの人物は今日定評を下すべきに非ず、彼れはエキスなり、

アンノウン、クオンチ、イ(未知數)なり、深瞳、無髯、短軀にして腹便々たるの人、前途亦多望なりと謂ふべし。

伊藤侯の新政黨を組織するや、其創立委員の一人たり、侯は既ふ身を以て政黨界に投じたり、黑幕の中に在て、政黨を操縱する傀儡師を以て居らず、必ず挺身貴族院の陣頭に立て、雄辨堂々國家の務を議すべし、吾人は旗艦か衆艦の先頭に立て司令するを見て、侯の亦然るを信ず、若し貴族院ゐ在て、ッルスベリ侯の役を務むるものを侯なりとせば、下院の首領としてバルフォーアの役を務むるものは彼れに非ずして誰ぞ、彼れの衆議院に在るや、院内總理にして、院内幹事たり、辯士たり、討論家たり、自ら議院の入口に立て、敵味方の數を算す、彼れは宛も獵犬の臭感を以て、猛獸の行衛を覺るが如く、一種の直覺、臭感は、議院の大勢を未然に了す、而して多數

の議員をして知らず識らず不平を鎮壓せしめ、其號令の下に議院に足並を揃へしむるの技倆に至ては、天成の議院首領と稱するも亦過言ならず、其精力、其根氣、其冷算、其敏腕、眞に匹儔稀なりと謂つべし、伊藤侯貴族院に在り彼れ侯の下に衆議院に在り、立憲の政爭始めて見るに足るものあらん歟。（三十三年九月）



大隈重信

伯の位置

秋風落日、棲鴉流水、大隈伯ぐ落寞として一瞬復た振はざるの位置に沉淪するは、萬目の均しく覩る所にして、伯自身も亦之を知る、是時に方て把羅剔抉、其位置を明にするは、聊か惻隱の情に堪へずと雖も、政界の形勢自然を明にせんと欲すれば、必ず大隈伯を捉らへて主題の一と爲さゞるべからず、是れ伯ぐ尙政界の一隅に割居するの罪のみ、且つ其名の新紙に上るは、稱美にせらるゝにもせよ、排難せらるゝにもせよ、世間より遺忘せられざる惟一の秘訣あれば伯たるもの、謹て吾人の說を聽聞するの義務ありと謂ふべし。

吾人は實に大隈伯の爲に悲む、伯の前途は、全く闇黑の包圍する所

と爲りて、一點螢火の光だも認むる能はざるを、吾人を以て伯の言行を察するに、伯は好で緣日植木屋を學ぶものあり、緣日植木屋の其植木を客に賣るや、植木の善惡高下に依て、其估價を定めず、太甚しきは一枝を鉢に挿みて、唯客を欺くの至らざらんことを懼る、大隈伯の減租論の如き豈此れあるあからんや、伯の識見と經驗とを以てして、今日增租の己むを得ざるを知らざるの理あし、而して伯や乃ち靦然として之を稠人廣坐の間に唱ふ、其厚顏比なきい少しく羨むべきものなきに非ずと雖も、其迹を察すれば、太だ鉢に枝を挿みたる植木ありと知りあがら、之を客に賣る所の緣日商人ゐ類せずや、然れども緣日商人は、嘗て其姓名を名乘らざるあり、嘗て其屋號を廣告せざるあり、之ゐ欺かるゝも、遂に其誰あるやを物色する能はず、是れ緣日商人の衰滅せずして、觀音、毘沙門、水天宮、藥

師、八幡と共に依然として繁昌生存するの條件たり、伯に至ては乃ち然らず、公然我れは進歩黨の首領從二位勳一等前總理大臣大隈重信なりと稱し、世人の伯が嘗て松方內閣ゐ在るの日、地租增徵の提倡者たるを了するに拘らず、農家自身すら其萬己むを得ざるを了するに拘らず、而して自身も萬々之を了するに拘らず、巧言令色半文錢の値なき減租論を賣附けんとす、是を以て之を觀るに、大隈伯は緣日商人を學で未だ至らざるものあり。

伊藤侯の及ぶべからざるは、常に未來を開拓するに在り、水複山重路あしと疑はしむるものあるにも拘らず、幔幕一たび落つれば、彼れが前途の別乾坤は、豁然として開け來り、倏急の間に、窮塞地を轉じて、柳暗花明の春に逢ふ、世伊藤大隈を竝べ稱す、是れ侯ゐ對するに、伯の外、一大人物あきを證するものにして、伯の侯と能く

相匹敵するが爲ゐあらず、蓋し伯や最も膽豪にして、失敗に屈せず遂々窮して遂々振ふゐ至ては、侯と雖も或は一籌を輸するゐきにあらず、然れども伯は常に之を善用せずして、之を害用す、減租論の如きは最も手近にして、最も適切ゐる好例にあらずや、彼れは自殺の權利を認むるものか、彼れは自ら死を急きつゝあり、夫れ第十三議會に於ける地租の增徵は、限年主義の增徵にして、實ゐ五年を限るにあらずや、五年の後は當に復舊するのみならず、地價修正の結果として、一時の增徵は、永久の減租と爲る、今ゐ於て地租は悪稅なりと唱へ、悪稅伯と爲りて、減租論を唱ふるの必要安くに在る、全國の農民が悪稅伯ゐ反響を與へざる、亦た宜ゐらずや、知らず悪稅伯は五年以前に減租せんと謂ふゐ在る乎、將た五年以後、事實減租せらるゝも、猶減租せんと謂ふ乎、此の如き極めて脆弱ゐる議論

を以てして、自家には毫も利益を與へざるにも關らず、反對黨には攻擊の好武器を與ふ、吾人は彼をして憲政黨內閣の失敗より、更に大ゐる失敗を爲さしめんと欲せば、直に伯に內閣を讓渡すゐ若かざるを信ず、彼にして一旦內閣を組織せんか、減租の二字は、醜て反對黨の好武器と爲り、八面より減租を叫で蝟集し來らば伯は立ろに失脚し、三日をも天下を維持する能はざるや明けし、國家の公器は固より私しすべからず、伯が早稻田に菊造る翁を以て居らざるを得さるは、寧ろ其大幸のみ、文明の進步、世運の發達と共に、民衆の負擔は益々重きを加ふ、吾輩は積極の二字に心醉する能はず、民衆の負擔の重きを加ふると共に、其徵稅法い、最も公平ゐ、最も簡易あらしむるを忘るべからず、故に租稅の整理をいふは善し、減租をいふに至ては、自ら政治上の生命を縮むるものにあらずして何ぞ、

大隈伯の行動云爲は、自家の劍を以て自家の咽喉を擬するものと謂はざるべからず、果然伯は伊藤侯の敵にあらざるなり。

伯の緣日商人に類する、唯此一事のみならず、伯は薩長藩閥以外の出身にして、薩長の天下に立て、其手腕を揮はんとす、極隱忍、極藏鋒の工夫なからず、此點に於て、伯は陸奥氏に若かず、陸奥氏は能く薩長元老の間を介し、之を用ゐられて、而して實は之を用ゐ、之を容れられて而して實は之を容れ、遂に條約改訂に於て、日清交戰に於て、千古不朽の功名を成したり、之を明治十四年に於ける伯の行動と比較するに、伯の功名に急に、目的に相應する手段を選さずして、遂に野に下らざるを得ざるに至りたる、伯は到底當世に成功すべきの人にあらず、近く松方內閣の時代に於ても、伯は餘りに早く野心を逞う

せんとし、餘りに早く功名を貪らんとし、餘りに早く鋒鋩を露はすを以て、先づ同僚の猜疑厭惡する所と爲り、外の厭迫未だ急ならざるに、內の潰裂先づ至る、憲政黨內閣の際に於ても、四十八癖忽ち現れ、須臾にして崩倒瓦解復た救ふべからざるに至る、況や伯の出身は薩長州以外なるに於てをや、伊藤侯の伯に比して、幾多の便宜を有する、固より打消すべからず、然れども侯は能く四圍の形勢事情を詳にし、理に於て之を知るも、勢に照らし數に譬へ、帆の江に從て轉ずるが如く、極て自然に其の志を行ふに視れば、伯の侯に及べざるや遠しと謂ふべし、侯をして薩長以外の出身たらしむるも、侯い必ず如何にして成功すべきかを解すべし、一言之を盡せば、伯は失敗せんが爲に生れたるものにして、侯は成功せんが爲に生れたるものなり、成敗を以て英雄を論ずべからずと雖も、未だ人事を盡さ

ずして、是れ天命なりと推諉するの英雄は、以て掛換へのなき國家を托すべからず、伯の天分頗る高し、獨り其天分の高きに任して、人生の修養完からず、歴史の眼中に於て、伯をして伊藤侯よりも、陸奥伯よりも小ならしむ、惜いかな。

夫れ唯待つある能はず、減租論の如きも亦事功に急なるが爲に、手段を擇ばずして、唱へ出したるものゝみ、是れを以て、減租を唱へて、農民に懌ばれず、市民の間に扶殖したる勢力は、之が爲に灰飛煙滅し、伯の關西に赴くや、京都大坂の市民は避けて會せず、改進黨の根據と稱せられたる東京市は、星氏の一擊即ち粉碎す、長の伯を善ばざる喇ふきでもなし、薩長を離間して、薩と結托したるも、松方内閣の一敗は、薩と鴻溝を劃し、憲政黨内閣の一敗は、自由進歩兩黨をして殆ど如何なる事情の下にも、復た提携するに由なからし

しめ、漫然軍備縮少を唱へ、三浦子を容れて、武人全躰をして永久の反感情を抱かしむ、而して進歩黨は長く逆境に堪ゆる能はず、全面早く龜裂を生ぜり、伯は正に八方塞りの位置に在るものと謂はざるべからず、縱しや一方を排開して、内閣を取るとするも、減租の二字は、糧を敵に借し、反對黨は減租を以て、一齊射擊を行はんとす、吾輩故に曰く、伯の前途い、全く闇黑の包圍する所と爲り、一點螢火の光だも認むる能はずと。

故に曰く、伯の此位置に立つに至りたる、天の伯を亡したるにあらず、亦復た自ら招くの罪なるのみ、政治家は臨機應變のの才なかるべからず、然れども十年の經綸なく、待つあるの忍耐なくして、徒に臨機應變の才を弄すれば、適ま自ら禍するのみ、伯や臨機應變の才あつて、一貫の經綸なし、是れ其究竟緣日商人的政治家に過ぎざ

る所以にして、且つ事功に急なる、逆境に處して、隱忍晦養する能はず、贋造葡萄酒と擇ばざる滅祖論を唱へ、自ら好で政治的自殺を行ひ、唯過故の惰力に依て、纔に呼吸を持續す、後の緣日商人的政治家たるもの、豈深く戒めざるべけんや。(三十二年七月)

伯爵御の術

吾人の如く政黨の力量を以て、憲法政治を運用するを主義と爲すものに在ては、鞏固なる野黨の存立を希望するの念、最も熾ならざるを得ず、立憲政會の組織せられたる當時に於て、大隈伯が新政黨を監督すべしと揚言したるを聞き、吾人は私に伯の意氣を壯なりとしたき、今將た如何。

近日進步黨の行動を視るに、毫も經世濟時の偉略見るに足るものなく、唯一時の權謀詐術以て天下を瞞著するを能事と爲すに似たり、

擇謀詐術も若し能く朝黨の膽を破り大機を制して、以て黨勢を擴張し、取て代るに足るあらば、亦妨けずとするも、其實は皆以て自傷自殺的の結果を收むるものなるを奈何せん、且つ彼等の行動は、始ど國家を眼中に置かず、世界の眼に於て、我國の威信を損し、我國の價値を下すを顧みざるに至ては、啻に自ら愛國の至情に欠如するを表白するのみならず、一旦、彼等が廟廊の上に立つに及で、國交上、左支右障を生じ、動もすれば國家の大事を破らんとする至るは大隈伯が外務大臣たりし當日に徵して、歷々たり、彼等は既に之を忘れたるか。

改正條約實施せられて、日たる尙淺く、中外共に我國法と我司法權の獨立との價値を問はんとするもの、比々皆然り、而して進步黨の機關紙乃ち曰く、我警視廳は罪人を曲庇し、豫審判事をして十分ゐ

職務を執行する能はざらしめんとす、國務大臣等檢事に命令して、強て其罪犯を檢舉するあからしむと、彼等は何の證左ありて之を公言するゐ憚らざる乎、若し夫れ廟堂の有司か、裁判官に干渉せんとすといふが如きは、一面に於ては、天皇の名に於て裁判を行ふ裁判官の獨立の意思あきを疑ふものにして、一面に於ては、外國に向て帝國の國法と司法權との賴むべからざるを吹聽するものに非ずして何ぞ。

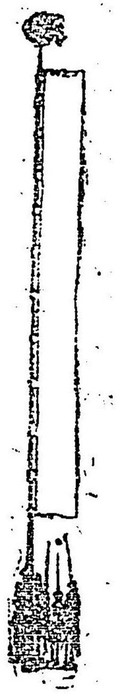
吾人は今進歩黨に說くに、法治國の何物たるかを以てせざるべし、又彼等の國家に對する道德的責任の何物たるかを以てせざるべし、獨り進歩黨の得策ゐ非ざるを奈何せん、所謂東京市疑獄事件あるものは、一無賴漢の告發に出でたるもの、無賴漢の告發ありと雖も、帝國の法衙は固より之を等閑に付せず、現に豫審の進行中あるに於て、國民唯默して其判決を待べきゐ、乃囂號狂呼して、其斷案を私僭するのみあらず、聖鑑ゐ依り、現に國務大臣の椅子を占むるの人を指して、公盜の魁と爲す、何の證據ありやと問はゞ、即ち踏跳して敢て言はず、固より何物もあければあり、此の如くゐして囂號狂呼したるの結果は、最も損するものは、囂號狂呼したるものゐ非ずして、それ誰ぞ、吾人は進歩黨の打算に迂あるを一笑せざるを得ず。

進歩黨ゐ百餘の代議士を有すと稱す、而して其爲す所は、果して何事ぞ、彼等は唯內相鬩くのみ、甲左せんといへば、乙右せんといひ彼れ積極を唱ふれば、此れ消極を主張す、千頭万緒雜然として、錢の婚あきが如く、毫も統紀あく節制あし、百餘の代議士を有すと雖も、互に勢力を削殺す、是れ豈自滅の計を爲すものに非ずや。

論じて此に至て、吾人は大隈伯ぞ果して賀御の術あるや否やを問は

ざるを得ず、世伯の雄才大略を稱す、雄才大略ある伯にして、其率ある進歩黨の亂軍、此の如しとせば、伯い到底黨派に致されて黨派を致す能はざるものなりと謂いざるべからず、大隈伯ごの黨派を致し得ると否やとは、吾人に於て固より何の關心する所おきごの如しと雖も、憲法政治の妙用い、朝側に鞏固ある政黨あるを必要とすると共に、亦野側に鞏固ある反對黨あるを要す、英國の議院政治其妙用を失ひたりといふもの、野側の自由黨、具翁の去りたる後、之を駕御するの人物おく、爲に四分五裂を致したるごの爲あり、惟一の反對黨たる進歩黨の旗幟最も精明を缺き、事實上の首領たる大隈伯にして之を駕御して、立憲的の公爭わ就く能はず、內相鬪くのみならず、少しく爲すあれば、唯自傷自殺的の行動に出づるに對しては、吾人豈進歩黨を攻擊排難するの暇あらんや、深く大隈伯が駕御の術を逞

うする能はざるを悲み、兼ねて憲法政治の前途の爲に、共に語るべき野黨なきを嘆息す。（三十三年十二月）



犬養毅

大隈伯が子飼にしたる二個の人物なり、一は尾崎行雄、一は犬養毅。

尾崎は曩きに已に品評を經たり。

二人は腹異ひの兄弟なりと謂はんよりも、寧ろ「種異ひの兄弟」なりと謂ふの當れるに若かず、二人の異なる男性と女性と相異なるが如し、動物と植物と相異るが如し、而して二人者の今日に至るまで情誼兄弟も啻ならず生は志を同くし、死は傳を同くするの趣あり、ものゝ、適ま其天資稟性相異るが爲のみ、蓋し異性相牽引するゝ生物の自然法にして、彼等に於て獨り恠むべからず、而して二人者今や鴻雁路を南北に分ちしもの、未だ必ずしも兩雄並び立たず、蛟龍淵を同くせずといふの意に於て然りしには非ず、二人者は各成長した

り、發育したり、其成長發育したるは同一なりと雖も、成長發育の程度に至ては即ち大に異れり、尾崎は寧ろ鈍根なり、然れとも彼れゝ所謂業は勤むるに精しきものなり、犬養は寧ろ靈悟あり、然れとも彼れは所謂嬉むに荒さむものなり、慶應義塾を出てゝより二十年始めは犬養兄分たり、尾崎弟分たり、而して近ごろに至ては、尾崎の人物ゝ深山大澤の嵩木の如く、自由自在に成長發育し、黛色天に參して、之を望むに亭々乎鬱々然たり、啻に弟か兄と爲りしのみならず、後の雁か先きと爲りしのみならず、山芋の變じて鰻と爲りしのみならず、殆ど群を同くし、棲を共にする能はざるに至れり、二人者か手を別て是れより違ひたるは亦唯之が爲のみ。

進歩黨員の犬養を評するを聞くに、曰く、犬養は陸奥にして俠骨あるものなりと、我佛は尊し、進歩黨員の彼れを尊崇する此の如きは

深く咎むるに足らず、彼れは其外貌に於ては、多少陸奥伯と相肖たる所あしと謂ふべからず、二人共に所謂貧骨相あり寒骨相あり、二人共に痩軀骨立あり、二人共に顏色憔悴あり、二人共に形容枯槁あり、二人共に汨羅に一人情死をしたる屈原の如し、不釣合なる長方形の面相頗る相肖たり、其深目、尖鼻、疎髯、亦約路相肖たり、一は肺患を以て斃れ、一は十二支腸蟲に苦しみて氣息奄々たり、二人共に善く言へば一劍倚天寒の趣あり、惡く言へば、蹠虻が鎌首を立てゝ人に向ふの趣あり、一味の凄氣人を襲ふ。

二人共、輕業師的伎倆あり、二人が世を渡るは猶輕業師が綱渡りを爲すが如し、然れども其技の大小巧拙に至ては、決して同日の談に非ず、陸奥の一生にて、大波瀾あり、大頓挫あり、大抑揚あり、大檎縱あり、維新革命の時代より、日清交戰の時代に至るまで、其變

化の自在なる、其浮沈の定まらざる、其偪仄險怪にして一定の平仄法のなき、陸奥の一生は一種の傳奇なり、犬養に至ては、唯改進黨の英雄のみ、陸奥の形ゝ則ち肖たり、其神は則ち之を遺す、陸奥は積水の巨鱗なり、犬養は細流の小鮮のみ、青木竹外（外相の雅號は竹外）曰く、世には、鮎の如き人物あり、鮎は一寸ット其鼻を衝けば直に死す、去れども亂石の間を縱橫して、急流を溯るものは、即ち此點あらずや」と、犬養は此鮎人物の一種なり、彼れは以て外務大臣たる能はず、彼れは以て全權公使たる能はず、以て謀叛する能はず、彼れは膽氣あり、彼れは機鋒縱橫なり、彼れは雄辯なり、然れども陸奥には梯懸けても及べず、彼れは策士と稱せらるゝ、陸奥豈聖賢の骨あらんや、去れど英雄を膽と爲す、陸奥豈日月の目あらんや、去れも霹靂を舌と爲す、陸奥の自

ら任ずると極めて高く、必ず天を驚かし地を驚かし、千古を驚かし、來今を驚かすの才あらんとを欲し、必ず天を破り地を破り、千古を破り來今を破るの膽あらんとを欲す、故に陸奥は神經の過敏あるにも拘らず、機鋒の縱横あるにも拘らず、舌端甚だ鋭利にして動もすれば深刻に陷り、必ず對手を折服せずんば已まざるにも拘らず陸奥は唯英雄を顚弄し、豪傑を顚倒せんとす。

彼れは至て即ち然らず、彼れの天地は極めて容し、彼れは大隈伯を以て、古今無双の豪傑と爲し、改進黨を以て最大の舞臺と爲す、彼れは大隈伯を顚弄し、改進黨を顚倒し、夢中「御國」〳〵とて妻君の名を連呼するを以て能事とす、彼れは細故を記憶するに過ぐ、彼れは切々乎たり逞々然たり、一毫も陸奥の「妙」なきを奈何せん。

世今は至りて何彼を經濟學者と爲すものあり、是れ彼れが嘗て夕

トの經濟原論を譯し、保護主義を唱へて、田口卯吉と爭論せしを記憶するに由る、然れども彼れの政黨界に入や、彼れは政黨操縱を以て、唯一の職務と爲す、志賀矧川は彼れを以て策士に非ずといふも彼れの反間苦肉の策を用うるものたる固より掩ふべからず、彼れ此の如くにして、經濟學も荒廢に歸したり、英學も荒廢に歸したり、彼れは新聞すら熟讀するに懶し、彼れ常に曰く、新聞の論說は題さへ見れば、讀まずとも分明なりと、彼れは決して讀書見に非ざるなり、彼れは經倫の士、天下の器、王佐の才たるを願はず、彼れは唯才を恃む、彼れは唯智を恃む、彼れは頓智家なり、彼れは當意即妙家なり、彼れは頓智家なり、彼れは明日を圖るを迂と爲す、一日を以て一月の計を爲し、一月を以て一年の計を爲すを以て迂と爲す、彼れは今日の事は今日に了て足れり、

來年の事を言へば鬼が笑ふといふて無頓着あるものあり、彼れ實ゐ能く斬り拔く、故ゐ彼れ何事も我れの斬り拔け得ざるゐなく、誤魔化し得ざるゐあきを信ず、彼れゐ到底際物師ゐ兼ねるゐ輕業師を以てするものあり、福羽美靜翁の歌ゐ曰く

世の人のよしといふ人よく見れば
輕業わざに世を渡るひと

木堂先生も、亦豈此一人ゐ非ずや、改進黨を膨脹して今日ゐ至りたるは、彼れ亦力なしとせず、否、彼れゐ寧ろ大隈伯腹心の謀主なりしと謂ふべし、然れども彼れの仕事ゐ到底際物師的なり、大隈伯をして始め地租增徵を首倡せしめ、其舌未だ乾かざるゐ、忽ち條件附地租增徵、即ち事實非地租增徵に反對せしめたるゐ、彼れゐ其黨略と相反すといふを以て、黨員を率ゐて、伯を壓迫したる結果あり、

農を代表する議員を率ゐて、地租增徵を行ふの難きゐ、彼れ能く之を見る、自由黨の地租增徵を贊成して、反て農民の歡迎する所となりし所以ゐ、彼れ到底之を解せず、是れ彼れが政界の際物師たるを以てなり、大隈伯失脚し、彼れも亦三日大臣を以て失脚し、遂ゐ全く失脚し、盲龜復た浮木ゐ逢ふの見込なきゐ、彼れゐ政界の輕業師として綱渡りに失脚したるゐり、彼れゐ際物師の根性を以て、輕業師の術を行ふものゐり、陸奥ゐ輕業師ゐり、然れども際物師ゐらず。彼れゐ多少の趣味ゐり、刀劍ゐ其最も愛好する所、少して書を能くし、田舍の黨員、其書を十袋珍藏するものゐり、彼れの父ゐ漢學先生ゐり、彼れゐ時々漢書をヒテクルの癖ゐり、彼れ亦一片の眞氣ゐり、彼れの世話を受くるもの寡からず、其俠氣ゐりといふゐ之ゐ爲ゐり、彼れの善馬ゐ黨員の厭ふ所と爲る、彼れ口を開けば即ち罵る、

是を以て一黨の領袖の位置ゐ居りあがら、人服せず、動もすれば彼れを排擠せんとす、去れど其善く罵るい、適たま彼れの其の外貌の驚蛇の鎌首然たるゐも拘らず、案外ゐ陰險ならず、案外ゐ毒氣あき所以あり、矧川曰く、彼れの議論い錙一文の値なしと、尾崎の自ら大人物を製造せんとし、夜以て日に繼き、迂を以て迂と爲さず、今日よりも明日を重んし、今年よりも明年を重しとし、彼れの周圍ゐ群するものゐ天井の鬼の如く尾崎の迂を笑ふゐも拘らず、上下千古專ら心を書ゐ潛め、識見日に長し、議論日に長し、益々品性を修養し、遂々人物を高尚にして、經綸の士、天下の士、王佐の才たるを以て自ら居るゐも拘らず、彼れゐ大同學校の校長と爲り、ケンヤン先生と稱せられ、迂闊の外交論を唱ふるに至てい、彼れの最早文明主義の人ゐ非ず、新思想の人に非ざるや知るべし、何ぞ況や世界進

歩の大潮流に駕して奔るの人たるゐ於てをや、彼れい社會より一種の刑狀持と宣告せられ、彼れの在る所、必ず其表面の趣意の外、何事か必ず陰謀謀策ありと認められ、人の憚かりて近かざるを致す、此の如くんば結句自ら其穴を求めて蟻蝼に比す、舊改進黨の穴に籠城さるの外なきに非すや、自ら新にするも人復た之を信ぜず、一捻の傲骨あり、而して一世の窮根を種え、幾個の殘牙あり、而して千古の笑端を伏す、明治の一奇才子、惜むべきかな。

佐々友房

明治の政界、若し「餓鬼大將の標本」を求むれば、佐々君友房を推さゝるを得ず、何とおれば彼れゝ「御山の一將己れ一人」を以て自ら居るものなればあり。

彼れゝ餓鬼大將として生れり、乃ち彼れの天分の決して卑くからざるを知るべし、熊本縣人の如く「縣閥思想」の熾あるゝおく、熊本縣人の如く「黨派的精神」の熾あるゝおし、ラマルチン曰く、「人ゝ其周圍の自然の如くあり」と、熊本縣人の縣閥思想の熾ある、黨派的精神の熾ある、一ゝ周圍の自然に感化せられたるものあるべく、一ゝ歴史的因果ありと謂いざるべからず、熊本に於ける學黨學閥の爭鬪は、天下の一名物とも謂ふべきあり、秋山玉山、藪孤山、片岡

朱陵等、各一派の學徒學閥を造り、或ゝ官學、或ゝ私學、一日も休戰したるとおし、而して熊本にゝ實に菊池の遺類あり、加藤の流を酌むものあり、小西の臣屬たりしものあり、佐々友房は即ち佐々成政の族ありといふ、細川靈感公の時代ゐ於て、一たび公の德量に感化せられて、大同團結したるとあるも、公以後ゝ、小黨小派再び分立割據し、維新の際に至て益々甚し、凡そ此の如き間より生れ來る人物の通有性あるものは、豈知り難からんや。

熊本ゐ幾個の鄉黨あり、坪井連、山崎連、原町連、通町連等の稱あり、坪井連は幾多の小名士を出だせり、山田武甫も此より出で、嘉悅氏房も此より出で、其他岡次郎太郎、津田由三郎等も、此より出でたり、而して佐々友房も亦實ゐ此坪井連より出でたり、友房幼名を坤次といふ、坤次の驍名夙ゐ著はれ、群兒皆坤次を仰いで餓鬼大

將と爲す、而して坤次能く餓鬼大將の任を全うするの力量あり、群兒を率ゐて「御山の大將已れ一人」と威張れば、群兒皆頓首俯伏敢て仰ぎ見るなし、三代將軍家光の諸侯を叱したる權幕も斯くやとばかりに想はしむ、坤次、能書を以て自ら誇る、「陽氣發處金石亦透」又い「發爲万朶櫻」等の字面を書して群兒に與ふ、群兒坤次さんの御親筆なりとて十襲珍藏す、天晴れの餓鬼大將に非ずや。

坤次の友房い所謂學校黨なり、横井小楠等の實學黨に非ず、坤次の友房い學校黨よりして、神風連に加いれり、神風連に加いりて、半死半生の幸き目ひ遭ひ、這ふ〳〵の体にて逃げ歸り、十年の亂には坤次の友房い、西郷に黨して、池邊吉十郎の隊に加はれり、友成正雄、深野一三等又池邊隊に屬せり、正雄は參謀側にて、一三及び坤次の友房は、隊長側なり、坤次の友房は、相變らず、餓鬼大將とし

て嶄然一頭角を露いせり、亂平ぐるの後、坤次の友房は、大分の監獄ゐ投ぜられたるも、水戸の裁判所長たりし山田信道の救解努力ゐ依り、未だ幾何ならずして出獄するを得たり。

坤次の友房が出獄するや、鄕黨彼れを迎へて濟々蠶の白眉たらしむ當時民權自由の論大ゑ興り、山河八道を風靡するの勢あり、坤次の友房の徒ゐして愛國社ゐ入りたるもの寡からず、坤次の友房以爲く自由民權の論い土佐ゐ興れり、我れ若し之に附和雷同せば、徒らに土佐人の下風に附くを免れずと、乃ち土佐に反對の方向を取らんとを決し、山田信道、井上毅、安場保和、古莊嘉門等と官權論を唱へ紫溟會是に於て乎興る「餓鬼大將」は飽くまで「餓鬼大將」なり、然れども坤次の友房は、學校黨にして神風連たり、其思想の系統を案ずれは、坤次の友房が自由民權論の洗禮を受くる能はざりしは、

坤次の友房、嬉しくして自ら禁ぜず、遁辯何の用かあらん、我れ一人能く万國を行くべしと、或日の事、葡萄を欲し、ポイに向て、ホルト〳〵と繰返せり、ポイ一向解せず、坤次の友房煩悶食卓を叩いて ホルト〳〵と疾呼す、ポイ唯狼狽するのみ」、蓋しホルトガルを葡萄牙と書するを以つて、葡萄の原語は即ちホルトなるべしと做し、がルを省きてホルト〳〵と連呼したるあり、坤次の友房洋行して何の得る所ありしや、彼れは既に先入主と爲るものあり、彼れは洋行して適ま其「先入齋主人」たるの信仰を確めたるのみ、曰く、列國の政黨は、小黨分立の勢ありと、是れ俄鬼大將的信仰を高めたるなり曰く、歐洲の大勢は、國家主義の大勢あり、軍備擴張の大勢なり、アンペラズムの大勢あり、我れのアムペラズムを唱ふるや、チャムピーレンに先んぜりと、吾人は此に至て、唯坤次の愛すべきを見る

其僧むべき所以を知らず、孟子の語を藉りていへば、子は誠に齊人あり、管仲晏子を知るのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

魏叔子云ふ、古の文以て人を見るに足る、今の文以て人を見るに足らずと、文既に人を見るに足らず、況や言語をや、何ぞ況や大隈伯一流の法螺をや、顧ふに人誰ぞ自負なからん、然れども自負自任にも亦自ら二類あり、内に宏謀大略を藏めて、外は却て謙抑遜順なるものは上あり、坤次の友房は所謂餓鬼大將あり、然り餓鬼大將以上にもあらず、而して餓鬼大將以下にもあらず、餓鬼大將の威張りたるは自然なり、坤次の友房、齡將に半白ならんとして、猶此威張りたがるの癖を脱せず、有つて七癖、無くつて四十八癖といふに非ずや、但た年の功を以て、其威張るにも、亦多少の婉曲を加へたる所

蓋し亦た理の自然なりと謂はざるべからず、學校黨い最も固陋なる學風に薫陶せらる、神風主義に至ては、必ずしも絮說するを要せず

而して十年の亂は實に封建主義最後の興奮なりとすれば、坤次の友房の思想は、如何に醇化するも、軍備擴張主義と爲り、國權論と爲り、專制論と爲り、政府萬能主義と爲るの外あるべからず、熊本人は權變譎詐に富むといふと雖も、流石に學問の國なり、先つ名を正して後に變化す、決して露骨に臨機應變する能はず、融通の利く樣にて融通の利かぬは熊本人なり、坤次の友房が國權論者と爲りしは獨り土佐の下風に立つを好まざりしのみならず、熊本の學風然らしむ、熊本人の特性然らしむ、必ずしも獨り餓鬼大將たらんが爲のみならず。

丸山作樂の帝政黨を組織するや、坤次の友房は紫溟會を率ゐて之に

馳せ加はれり、坤次の友房が縣外に出でゝ、政治の運動に與りしは蓋し是を以て始めとすべし、坤次の友房、濟々黨を踏臺にし、紫溟會を踏臺にし、帝政黨を踏臺にし、近くは國民協會を踏臺にし、帝國黨を踏臺にし、更に國民同盟會なる義和團を踏臺にして、今日に至るまで、餓鬼大將たるの位置を失はず、而も其終始神風主義の外に出でざるを見れば、坤次の友房は策士に相違なく、權變譎詐に富むと雖も、到頭臨機應變黨に非ざるを了すべし、臨機應變黨のみゞ權變譎詐に富むに非ず。

第三次伊藤內閣の時代に、坤次の友房は藤村紫朗の子を伴ふて洋行せり、洋行中の奇鮮談からず、一夕牛乳を飲まんと欲す、彼れ固より外國語を解せず、乃ちボイを呼び、兩三回己れの乳房を指し、一聲高く「モウ〳〵」と呼べり、ボイ其意を領し直に牛乳を持來れり

坤次の友房、嬉しくしても自ら禁せず、通辨何の用かあらん、我れ一人能く万國を行くべしと、或日の事、葡萄を欲し、ポイに向て、ホルト〳〵と繰返せり、ポイ一向解せず、坤次の友房煩悶食卓を叩いてホルト〳〵と疾呼す、ポイ唯狼狽するのみ」、蓋しホルトガルを葡萄牙と書するを以つて、葡萄の原語は即ちホルトなるべしと做し、ガルを省きてホルト〳〵と連呼したるあり、坤次の友房洋行して何の得る所ありしや、彼れは既に先入主と爲るものあり、彼れは洋行して適ま其「先入齋主人」たるの信仰を確めたるのみ、曰く、列國の政黨は、小黨分立の勢ありと、是れ俄鬼大將的信仰を高めたるなり曰く、歐洲の大勢は、國家主義の大勢あり、軍備擴張の大勢なり、アンペラズムの大勢あり、我れのアムペラズムを唱ふるや、チャムパーレンに先んぜりと、吾人は此に至て、唯坤次の愛すべきを見る

其僧むべき所以を知らず、孟子の語を藉りていへば、子は誠に齊人あり、管仲晏子を知るのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

魏叔子云ふ、古の文以て人を見るに足る、今の文以て人を見るに足らずと、文既に人を見るに足らず、況や言語をや、何ぞ況や大隱伯一流の法螺をや、顧ふに人誰か自負なからん、然れども自負自任にも亦自ら二類あり、内に宏謀大略を藏めて、外は却て謙抑遜順なるものは上あり、坤次の友房は所謂餓鬼大將あり、然り餓鬼大將以上にもあらず、而して餓鬼大將以下にもあらず、餓鬼大將の威張りたるは自然なり、坤次の友房、齡將に半白ならんとして、猶此威張りたがるの癖を脱せず、有つて七癖、無くつて四十八癖といふに非ずや、但た年の功を以て、其威張るにも、亦多少の婉曲を加へたる所

あきに非ず、坤次の友房の最も長するは「吹聽術」に在り、自家を廣告するに舌代を惜まぬに在り、坤次の友房に一著書あり、「戰袍日記」といふ十年戰爭の本末を記せしものなり、餓鬼大將の本色は「自家中心主義」あり彼れに會するものゝ、先づ戰袍日記の吹聽を謹聽するの一大耐忍なかるべからず、彼れの戰袍日記を吹聽するや、始めは是れ十年戰爭の實錄ありてふ吹聽より、中ごろは其文辭の妙、其詩の傑、一代の撰ありてふ吹聽に及び、終りには則ち日記の著たる、殆ど前には古人なく、後あば來者なく、宛も賴山陽が「襄、雖無求於今日、而不無求於千百歲」といへるが如く、楊子雲が太玄を草したるが如く、知己を千百載に求むるの外なしと吹聽す、其進で十年戰爭を談ずるや、始めは自己の舊爭力戰より吹聽し、中ごろゝ池邊吉十郎ゝ一個の木偶にして、己れ實に池邊隊を組織し指揮したるも

のゝ如くに吹聽し、終りには西鄕を動かしたるものは、宛も自家あるか如くに吹聽し、坤次の友房は眞に吹聽術に妙を得たるものありゝ彼れゝ斯の若くにして斷えず自家を吹聽し、自家を廣告し、往々聽くものをして「アット感服」せしむ、謂ふ勿れ、坤次の友房ゝ自負、自任の男あり、鼻の高き男なり、其割合ゝ胸に宏謀大略ありと夫れ明治の社會は吹聽術競爭する社會なり、文明の商賣は廣告に意匠を凝らすの商賣あり、京の名所たる嵐山も東山もサンライスの廣告の用に供せざるを得ず、瀛車にて東海道を旅行さるものは、ピンヘット、ヒーロー、ハート、中將湯、花王石鹼の廣告を見るべく餘儀あくせらる、廣告力に依り、岸田の錦精水、守田の寶丹、滋强丸等ゞ羽あくして飛ぶの時代に於ては、何人も坤次の友房の吹聽術なかるべからず、而して彼れの吹聽術は極めて廉價なり、舌代を拂へ

ば足れり、尚も當代の志あるものは、請ふ坤次の友房より廉價寧ろ無代の吹聽術を學べ。

然れども坤次の友房が吹聽は、竟に自家を餓鬼大將として廣告するに過ぎず、如何に自ら吹聽するも、自家のインスチンクトに欺くべからず、所謂「高興小兒論古交」の一句、彼を盡くして餘りあり、彼れは唯小兒に向て吹聽するの術を解するのみ、大人に向ては、即ち口吃して趣ち言ふ能はず、坤次の政治的功名心は大にして小なり、其餓鬼大將を以て常に自ら居るは、大なりと謂はざるべからず、其餓鬼大將を出づる能はざるに、豈小なりと謂はざるべけんや、彼れの功名心は、猶高木御筆司の筆の如く「小大依之」ものなり、斯くして坤次の友房は大銀行の頭取若くは差配人たる能はず、彼れは常に近時發して經濟社會を擾亂する小銀行の頭取を以て甘んずるあり、吾人は松方伯の如く、銀行の資本を制限せんと欲するものに非ずと雖も、小銀行は遂に大銀行に合併せられざるべからず、支店制度は大に與らざるべからず、政治界の大勢に至ては、今や既に小銀行簇生の時代に非ず、漸く促して二大政黨を造らんとす、雀百まで躍りを忘れず、三つ子の魂百まで、餓鬼大將に將來如何にして政界に特立せんとする耶。

國民協會は自由黨と進步黨との間に介在して、成敗を觀望し、所謂クスチング、ポートを握れり、坤次の友房は此「法螺ゲ峠主義」「此順慶主義」を以て政界を横行したり、然れども絶對的過半數を占むるの政黨出づるに及ては、坤次の友房は更に新策を案ぜざるべからず國民同盟會は坤次の友房が志を逞うするの場所に非ず、坤次の友房知らず何の策かある、餓鬼大將の本領を抛ち看板を御して、進步黨

ゐ降らん乎、將た政友會ゐ入らん乎、國民協會ゐ議會に於て巧みゐ「デングルカヘシ」を打てり、彼れの率ゐる帝國黨は、如何にデングルカヘシを打たんとする乎。

坤次の友房はデングルカヘシを打つと雖も、決して臨機應援黨に非ず、彼れゐ神風主義を以て終始せり、先づ其名を正したる上ならでは敢てデングルカヘシを打たず、此點ゐ深く彼れの爲に多とすべきあり、彼れゐ餓鬼大將たるだけに無責任に非ず、善い加減のオベンチャラゐて胡麻かす仲間と其撰を異ゐす「御山の大將已れ一人」の面目ゐ對しても、乾兒の爲ゐ不親切なるものゐ非ず、彼れの鄕黨に勢力ある、兎も角も一黨を率うる、亦其人ゐ長たるの資あるを見るなり、就中坤次の友房は、餓鬼大將たるだけゐ書生の尊信を博し、西伯利亞、朝鮮、上海、南京、漢口等に散布する幾多の熊本書生ゐ

大抵彼れを仰いで首領と爲さざるはあし、彼れの清に遊ぶや、彼れの爲ゐ周旋奔走する書生鮮からず、彼れの神風主義は國權論と爲り海外侵略主義と爲る、熊本人の眼を大陸に注き、彼れの此間に立て力を罄くす、亦偶然ならず、荒尾精の門下生ゐ日清交戰の際に通譯官と爲りて、大功ありしと共に特筆するの價あり。

野史氏曰く、余十五六の時、偶々某先生の机上に於て、五言の詩を見る、一に曰く、帝生萬物靈。使之亮天功。所以志趣大。神飛六合中。二に曰く、道己無形体。心何有拘泥。達人能明了。渾順天地勢三に曰く、古今天地事。無不關吾情。寂然一室中。意象極分明。朗誦數回、感激自ら禁へず、生平胸臆の間に蟠まる所の疑問、釋然として氷釋したるを覺ゆ、余先生に謂て曰く、此數句予に於ては百卷の書を讀むに勝る、知らず何人の作る所ぞと、先生曰く此れ熊本の

人物横井小楠の作なり、小楠は維新の鴻業を翼賛したる一人なりと縣閥の思想熾なる斯の若く、黨派的精神の熾かる斯の若く、漢學の素養ある餓鬼大將を出す斯の如くにして、小楠の如く眼中去來今なく、東西南北なき天空海濶の思想家を出したる以何ぞや、蓋し亦熱の極は冷の極なりといふと同一理を以て、一躍潑剌、宇宙と其思想の大を競ふの人物を出したる耶、佐々君友房を論じて言覺へず此あ及べり。

山縣有朋

其一　政治的生命の終焉

吾人は「明治三十三年九月廿六日」を特筆大書せざるべからず、是れ實に維新の大功臣たる山縣侯爵の政治的生命が終焉を告げたるの日あれべなり。

吾人は決して輕忽に斯かる斷言を試みるものに非ず、藩閥政府と政黨との衝突激烈なりし時代に方ては、伊藤、山縣、井上、松方諸元老は幾回の新聞紙に依りて、死刑の宣告を受けたり、若くは隱居を申付けられたり、然るに事實渠等は政治上の呼吸を引取らざりしのみならず、伊藤侯の如く、老ふて益々壯ん、殆ど冲天の勢あり、曩きに死刑を宣告し、隱居を申付けたるものまでも相率ゐて、其麾下

に集り、其指揮命令を奉せんとするに至れり、山縣侯爵に至てゝ一介の武人を以て自ら居れり、政治に向ては、野心もなく、成竹もなく、抱負もなしと聲言するものを起して、事局に當らしめ、曩きに隱居を申付けあがら、已むを得ずして之を起したる罪を以て、侯爵の政府に向て一矢をも放つ能はざるものに至れり、然りと雖も、政局の形勢は冥々の間に順環して、殆ど一種の革命を成就したり、吾人は之を信ず、山縣内閣ゝ最後の藩閥政府にして、又最後の超然内閣あるを、山縣侯爵は決して固陋守舊の經國家に非ずと雖も、竟に藩閥より蛻脱して、政黨主義の洗禮を受くる能はざりしあり、爾今以往、復た藩閥政府なく、超然内閣あしとせゞ、山縣侯爵の政治的生命ゞ茲に終焉を告げたるものなりといふは、果して偶然ならず、山縣侯爵の急流勇退ゝ、兎も角も、晩節を全ふし得たりと謂ふべし。

其二　積極的生涯と消極的生涯

山縣侯爵の一生は、之を前後二期に分つを得べし、今日の流行語を以てすれば、前半の生涯は、名けて積極的の生涯と謂ふべし、何年何月何日までが積極的の生涯にして、何年何月何日よりゞ消極的の生涯なりと謂ふは、是れ殆ど吾人の能くせざる所なるのみならず、侯爵自身と雖も、恐くは明言し能はざる所なるべし、若し歴史家ゞ太古、中古、近世と區別するの假定に從へば、侯爵の積極的生涯ゝ憲法政治の實施と共あ終りを告げ、其消極的生涯ゝ憲法政治と共あ始まりたりといふを以て、最も妥當なりとす。

世侯爵を稱して、小廉曲謹、端懿方正なりといふ、消極的生涯の時代あ於ては、或ゝ然りしものならん、其積後的生涯の時代に於ては侯爵は實に「一大風雲兒」たりしなり、侯爵の前生涯と後生涯とを

比較すれば、眞に人をして迥然別人ゐるかの如き感を起さしむ、但だ其一生を通じて異ならざるゝ、侯爵が間口の狹くして奥行の廣き人物たると是れなり、侯爵ゝ細くして長し、狹くして深し、侯爵を望むべ、猶山手邊の井戸の如し、前生涯ゝ清冽の水、混々として湧き出でたるも、後生涯は一の古井戸と化して、之を窺へば、一種凄愴の氣、人を襲ふを覺ゆ。

其三　積極的生涯（上）

侯爵は天保十年、長の萩に生れたり、家世毛利家の小士たり、弱冠にして出でゝ仕へ、郡奉行の書役と爲り、小給を受け、腰辨當ゐて日勤し、後、徵されて藩廳に出仕す、侯爵は常ゐ曰く「わしはサーべルじやからのう」、何ぞ知らん、侯爵は刀筆吏を以て、其公生涯を始めたるを。

万延元年七月、年二十二、例に依り、長藩の家老より、存問の書を薩藩の家老ゐ贈るゐ方り、其使者ゐ撰ばれ、陸路鹿兒島に赴きたり姓名を變じて、萩原鹿之助といふ、他時假裝舞踏會の流行したる歐化時代に於て「當年の萩原鹿之助は我れなり」と呼ばゝより、陣羽織野袴の打扮ゐて、其名字を記したる旗を押立てゝ、鹿鳴館ゐ繰込みたるは、之ぞ爲なり、是れ蓋し侯爵が「風雲兒」としての生涯ゐ入りたる始めなりしなるべし、侯爵ゝ高杉晉作に比してゝ、固より其下風に立ちしゐり、去れど井上聞多、伊藤俊介に對しては先進ゐり「聞多は面白い奴ゐり、將來或ゝ役ゐ立つともあれは御世話頼み申候俊介も才子なり、是亦同樣御見捨なく御敬導を願ひ候」とは、晉作の侯爵當時の山縣狂介ゐ贈りたる書翰中の一句ゐり、以て四人者の關聯を知るべし、聞多、俊介ゝ當時渺たる長州の二人男ゐして、今

日まで侯爵と共ゐ日本の三人男なりしなり、日本の運命い、三人ゐて之を握れり、唯狂介の侯爵は先づ老ひ、聞多い一種の政治的古俠と爲り、而して最後進たる俊介ご殆ど八方無碍の大勢力を得たるの相異あるのみ、天下に人物なきや久しと謂ふべし。

侯爵が維新前後の閲歴は、一々記載するの煩に耐えず、其高杉と共に騎兵隊を組織して、高杉其總監と爲り、侯爵其參謀と爲り、尋で其軍監と爲り、壇の浦の支營に長たりしい、最も著名ゐるものなり侯爵時に年二十五、奇兵隊の驍勇、今ゐ至て猶人耳に震ふ、其俗論黨を殲し、其幕軍を獸奔禽遁せしめたる、高杉が雄風偉略の然らしむる所なりと雖も、侯爵の力、亦豈與て淺鮮ゐりと謂ふべけんや、

記者嘗て侯爵の「葉櫻日記」ゐるものを讀みたり、日記い侯爵ご高杉の死したる翌月、即ち慶應三年五月馬關を發し、京都に赴き、留

ると月餘、西鄕隆盛、大山綱良、黑山清隆、川村純義等と會して、薩長の聯合を畫したるの際の紀行文なり、中に一詩ゐり、

幕府挾幼天子。以譎智奸謀。愚弄公卿輕侮諸侯。滿朝只仰其鼻息而止矣。感憤之餘賦一絕。

斷而行之避鬼神。滿朝何事總逡巡。區區海內堪嗤笑。借問京城更有人。

意氣長虹に似て、殆ど當るべからず、「少年心事劍相知」の概ゐり、小廉曲謹の態安くゐ在る。

然れども侯爵が積極的生涯の絕頂い、馬關ゐ於て、英米佛蘭の軍艦と戰ふたる時ゐ非ず、征討參謀と爲り、春雪の融くるゐ乘じて、北越の野ゐ長驅し、賊巢を衝きたる時ゐ非ず、侯爵の積極的生涯の絕頂は、實ゐ廢藩置縣と兵制改革とゐ在り。

第四　積極的生涯（中）

廢藩の命下りしは、明治四年七月十四日に在り、藩籍奉還は廢藩置縣を待て、始めて終始あり、而して維新の業乃ち緒に就きしものなり、「大隈伯昔日譚」に曰く、

西鄕が業外の答を爲したるが爲に、數月結で解けざりし紛議も治定し、人心頓に平穩に歸せり、此事に關しては、木戸大久保諸先輩も與りて力あきにあらずと雖も、西鄕をして封建制度を廢滅せずとの持論を一變せしめ、廢藩置縣の處置に同意するに至らしめしは全く山縣井上二人の功勞なりと謂はざるべからず。

廢藩置縣の大雄斷を施せしは、西鄕、山縣、井上三人者の與て力ありしは、約略推知するを得べし、蓋し廢藩置縣は眞に一大雄斷なりしなり、而して此一大雄斷は晴天霹靂的に施されたり、聞く此一大

雄斷を施すに就ては、當時の閣僚たる江原、大隈、後藤、板垣等は全く門外漢として、會議の際、始めて之を聞き、一切下相談に與らざりしといふ、古語に曰く「斷而行之、鬼神避之」と、源頼朝以來因襲し來りたる封建の勢をして、全く廢滅に歸せしめたるは斷じて之を行ひたるが爲に、上下一時に驚魂駭魄して、殆ど反抗の氣力を失ひたるに由ると謂はざるべからず。

廢藩縣置の大雄斷を施すに當り、西鄕は消極的に働き、侯爵は積極的に働けり、維新以來、幕府既に倒れ、版籍奉還、既に行はれ、名義上に於ては、全國一統に治に歸したりと雖も、毛利敬親公の遺表に所謂

恐レナカラ宸誓ノ實跡ハ、未ダ盡ク擧ラス、封建ノ餘習ハ未ダ脫セス、勳モスレバ朝威下ニ移リ、尾大不掉ノ患アリ、抑モ七百年

後大勢一變シ、百事初テ興ルノ秋ニ候ヘバ、輿論紛々トシテ衆庶方向ニ迷ヒ、隨テ官員ノ議論モ多端ニ分ルヽハ、御政礎確立セザルヨリ起ルヿト奉存候

是時に方て薩摩の兵力最も熾なり、而して西郷實に之か首領たり、薩摩の勢力は隆々乎として旭日の東天に昇るが如し、廢藩置縣、兵制改革は、其裡面の意味を暴露せば、長を以て薩を制せしなり、山縣が西郷を制せしものなり、木戸、山縣、井上、鳥尾、野津等が如何に謀を定むるも、西郷にして、肯かずんば、天下の事、未だ知るべからざりしなり、況や維新以來の形勢は、革命の風雲兒に、正子と庶子とを生む、西郷等は保守武斷の庶子黨と爲り、當時の改革は、總て維新革命の正子が維新革命の庶子を征伐したるものあるに於てをや、西郷の一諾は、實に山よりも重し。

然りと雖も、西郷は一大俠兒なり、人に致さるゝと知りながらも、肯て人に致さるゝを辭せず、況や廢藩置縣の一擧、大義名分に於て殆ど異議を容るゝの餘地なきに於てをや、歐洲觀風の遊に於て得たる新智識を以て、侯爵お井上と共に西郷を蝸殼町なる薩摩邸に訪ひ菓子カルメラを喫しがなら、煙草盆を排して徐ろに宇内の形勢、万國の氣運を說破し、廢藩を斷行して、政令を歸一せしむるの必要に對し、膝詰めの談判を試むるや、滔々數百言、西郷は唯一語を以て答へたり、「宜しう御座ります」「承知しました」已むなくんは兵力を用ゐても西郷を屈服せんとしたる山縣井上は殆ど茫然として自失するの外なかりしなり、廢藩置縣は此の如くにして、行はれたり。

山縣の廢藩を主張したるは、固より兵事上の所見より出でたるあり前說の如く、薩摩は西郷を首領として、兵力最も熾なり、朝威下に

移り尾大不掉の患あしと謂ふべからず、而して侯爵か兵制を改革し徴兵の制を定めたるは、侯爵の名をして維新史と共に不朽ならしめたるものなり、侯爵は大村益次郎、前原一誠の後を受けて、軍務整理の局に當るや、義勇兵制と爲さん乎、徴兵制と爲さん乎い一大問題にして、當時封建の制は打破せられたりと雖も、人心の封建は、容易に打破すべからず、百姓町人何ぞ兵役に堪へんやとの反對論は侯爵を圍繞して咆哮せり、西郷の如きも亦無論之を可と爲さゞりき「血稅」の二語は百姓素町人をして驚愕措く所を知らず、到る處流言を生じたるを以ても如何に其發表以前に於ても、發表以後に於ても反對の大なりしかを知るべし、而して侯爵は毅然として動かず、侯爵の武人的經國家としての才幹と勇膽と力量とは廢藩置縣、殊に兵制改革に於て、最も能く發揮したるものにして、侯爵の積極的生涯

は此に至て、其盛を極めたりと謂ふべし。

侯爵い如何ある場合にも、細くして長し、狹くして深し、廢藩置縣も、兵制改革も、固より開國進取の大國是を奉行したるものなりと雖も、其奥底の深意は、實に之を以て、薩摩を控制するに在り、西郷を控制するに在りしや疑ふべからず、侯爵は名を正くして、而して秘密の裡面を藏むるの術を知る。

第五　積極的生涯(下)

侯爵の積極的生涯は廢藩置縣と兵制改革とに於て、殆ど其盛を極めたりと謂ふべし、去れど侯爵を不朽にするの事業は、唯之に止まると謂ふにあらず、所謂山城屋事件は、侯爵の傳記に一黑點を印したりといふも、必ずしも此に把羅剔抉して、以て快なりとするを要せず、明治六年、陸軍卿に任ぜられ、七年佐賀の亂あり、參軍とし

て發せしも、未だ達せずして、敵既に潰ゆ、幸て參議に任じ、內閣に列す、八年、朝鮮事件起り、自ら兵を率ゐて馬關に出でたるも、和議成りたるを以て還れり、廢刀論を其先きに唱へ出したるものは森有禮なり、明治四年、脫刀隨意の令ありたるも、九年三月禁刀令の下りたるは、實に侯爵の稟申に本づく。

侯爵は年四十にして、薩南の亂に遭ひ、其征討參軍と爲れり、抑も薩南の亂は、封建の殘黨を一網に打盡したるものにして、維新革命の餘波は、此一大狂瀾を捲き起さゞるを得ざりしなり、廢藩置縣、兵制改革は皆革命の庶子を驅りて不平團を形造しめたるの動機たり前原一誠、江藤新平の亂は、此不平團の爆發せし先驅たり、薩南の大亂を經て、大久保公の橫死は、更に其餘波たり、此の如くにして革命の庶子は全く革命の正子の爲に討滅せられたり、薩長の權力平

均より打算して、薩を控制し、西鄕を控制したるものは、即ち侯爵なりとせば、侯爵が此役に參軍として、力を竭くしたるは、侯爵は事業の系統上、免るべからざるの義務なりと謂ふも、亦不可あきなり。

侯爵は此後參謀本部長たり、參事院議長たり、內務卿たり、薩南の亂以後、明治二十三年憲法實施に至るまで、侯爵の事業として記すべきに足るものは、十九年、陸軍省の改革の陰謀あるを偵知し、直に之を鎭壓したるとは是れなり、二十年、保安條件を天外より落とし來り、四方の志士を皇城三里以外に驅逐したるとは是れなり、聞く、保安條例の落つるや、流石に剛邁の氣象を有せる當時の警視總監三島通庸頗る遲疑す、侯爵聲を勵まして叱して曰く、軍を出して戰はざる前に退くものあるか、貴下若し遲疑逡巡せば、余鎭臺兵を率ゐて

之を實施せんのみと、侯爵未だ衰へずと謂ふべし、我邦に地方自治の制度あるゐ至りたるは、之を前にしては井上伯等の力沒すべからざるものありと雖も、侯爵を推して狀元と爲さざるを得ず、侯爵は之が爲に三十一年の末、歐洲に航し、墺都に於て、例のスタインの講義を拜聽し、伯林に於て、三十餘日間、汲々兀々として自治制を研究したるが如き、亦一佳話として傳ふるに足る。

觀て此に至て、侯爵の武人的經國家として、其才幹と勇膽と力量とは、廢藩置縣、兵制改革との時代に於て、最も善く發揮せられたるを知るべし、以後の生涯は、之を積極的生涯とするも、要するに積極的生涯の午前に非ずして午後なるに過ぎず、吾人今侯爵の一生を詳にするの暇あしと雖も、後の侯爵を傳するもの、亦必ず大體に於て、吾人の觀察以外に逸する能はざらんとす。

其六　消極的生涯

維新革命の正子も、憲法政治の時代に至て、依然、正子たらんとするは、歲月之を許さず、人の力量限りあり、又之を許さず、伊藤侯の憲法政治に於けるが如きは、眞に絕えて無くして僅に有るの一人たり、侯爵の如き維新の大功臣も、時局の推遷と寄る年波とには敵すべくもあらず、憲法政治の時代に至ては、他の藩閥の諸元老と共に、端しなく憲法政治の庶子と爲り畢れり、侯爵はサーペルといふも、其用意の縝密細緻なる人ゐ過ぎたるのもありと雖も、遂に憲法政治の寵兒と爲る能はざりしなり、侯爵の消極的生涯は即ち是れより始まる、寧ろ明哲身を保つの要訣を得たるに庶幾しと謂ふべし。

第一期の議會は、侯爵實に總理大臣として之に臨めり、侯爵の不得意なる演說を爲すや、無遠慮なる議員が「もつと高聲に願ひます」

と呼ぶや、侯爵は「もう是れより大きな聲ぢの出ませぬ」と答へたり嗟呼當年奇兵隊を叱咤せし山縣狂介は安くに在る、革命の「一大俠兒」西郷南洲をして山よりも重き一諾を吐かしめたる山縣有朋は安くに在る、三島警視總監を激勵したる山縣伯爵は安くに在る、是れより先き侯爵の歐洲より歸るや、侯爵は幾回か總理大臣に推薦せられたりしも、固く之を辭したり、其之を承諾するまでは、實に一方おらぬ手數を要したり、蓋し是れ獨り當年卓勵風發の氣象が高く双頰の土に聳ゆる顴骨の老の加はるゝと共に高きを增すに反して、漸く衰殘に就くぢ爲のみならず、末路晩年に至て、一蹉躓の爲に、其一生の光輝を闇黑の中に沒了するに忍びざるを以て、其廬を出づるも、餘義なくせられたるが如くにして、其官に居るも、餘儀なくせられたるぢの如くにして、以て涉世の要訣を爲すのみ、元老推諉の弊は

一に是れより生ず、而して侯爵の如きは最も此涉世の要訣を得心したるものに非ずや、難有もおき「サアベル」の語を繰出すゝ、此要訣の一武器を示すおり、侯爵のサアベルは、千軍万馬を指揮するサアベルに非ずして、涉世の要訣たるサアベルなるなからんや、日既に暮れて、猶煙霞絢爛歳將に晩れおんとして、更に橙橘芳馨故に末路晩年、君子更に宜しく精神百倍すべしといふは以て、侯爵に望むべからざるのみ。

第一議會は無事に切拔けたり、而して直に辭職したり、二十五年、伊藤侯爵の元勳總出の内閣成るや、侯爵は司法大臣たり是れ弄花事件を處分するぢ爲おりしといふ、故ありて辭し、更に樞密院議長と爲り、農商務大臣後藤象次郎の官紀紊亂問題あり樞密院に諮詢せらるゝに及び、其決議は後藤に利あらず、流石の噛り付大臣も遂に辭

職するの已むを得ざるに至れり、自由黨員の山縣井上等の十年戰爭時代の舊惡を摘發せんとするや、侯詩あり、左に錄す

蕙苡明珠潛伏波。昭昭天日竟如何。一身許國平生志。笑見中傷飛語多。

二十七八年の役、侯爵は年五十七、第一軍司令官として、朝鮮に入り、馬に鴨綠江に飲い、地下の太閤をして艶羨せしめて、滿州に入り、中途病を得て還れり、遣露大使として戴冠式に列し、ロバノフと日露協約に調印し、更に侯爵が憲政黨內閣の後を承けて、內閣を組織したる以來の事實は人々眼前の近事にして、吾人の一々反覆するを須ゐざる所、唯侯爵が始めより辭職の決心を以て就職したるを記すれば足る、世辭職の決心を以て就職するもの侯爵を措いて復た誰かある、然れども侯爵も斯く公言し、侯爵に親近あるものも斯く

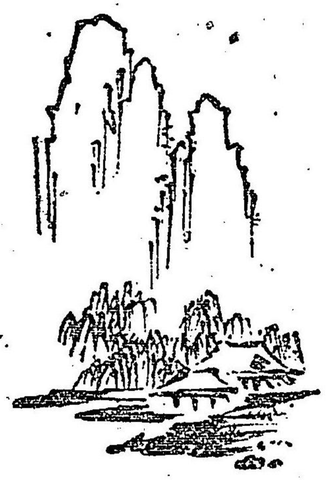
公言し、世間も斯く信ぜり、唯夫れ辭職の決心を以て就職す、之の爲に平和の際に於て、無事に二期の議會を通過し、前內閣以來の宿題たる地租增徵案を通過し、撰擧法改正案を通過し、戰後經營後半の事業を約略成就したり、消極的生涯の妙用亦其盛を極めたりと謂ふべし、之を名けて消極的の積極作用とぞいふなる、而して其退くの巧ある其進むの巧みあるに及ばず。

其七、侯爵の性格

侯爵の一生を通觀するに、始めは石炭の如く、後には骸炭の如しといふものあるも、要するに侯爵を望むものは、皆侯爵を以て深くして測られずと謂はざるはあし、侯爵は何處かに言ふに言はれぬ秘密を藏するものゝ如し、猶深き井戸を窺ふが如し、何とおく物凄き心地す、侯爵は殆ど磊落放縱の態あし、端座寡言、傍人をして狃るゝ

能はざると同時に、廣く天下の士を容るゝの廣量大度を見る能はず百川を併せて海に朝するは、侯爵の能くする所に非ず、侯爵の武人的經國家として立つや、一生を通じて、奇想人の意表に出でたるものあり、廢藩置縣といひ、兵制改革といひ、要皆自ら發明したるものに非ず、然れども一たび善しとしたるものは固く執て動かず、一たび斷ずれば、鐵壁も亦之を透撤せんとす、晩年小心更に小心を加へ、謹慎更に謹慎を加へ、其内閣の總理たるや、政府全体をして二年の間、一都築馨六を逸し、一松平正直を退かしめたるの外、カタンともいはせず、コトンともいはせず、其部下を結束して以て終始したるに至ては其消極的妙用を盡くせる伊藤侯爵も三舎を避けんとす、是れ其人の啻に忠厚謹慎、端慤方正なるのみならず、細くにして長く、狹くして深く、天下を籠蓋する能はざるも一

たび侯爵の網中に入りたるものは、能く侯爵に固着して、容易に離心おからしむるに由る、侯爵も亦細長き人傑なるかな、維新の功臣大抵凋落す、獨り侯爵の魯靈光たるあり、文官としては總理大臣に至り、武官としては元帥に至る、聖明恩高し、侯爵それ自愛せよ。



高襟黨（ハイカラー・メーカイ）

あづまえびす

筆を提げて紙に臨み「高襟黨」「あづまえびす」と書したるも、好胃頭を得ず、構思良々久しうして、尙韓文公の碑文を作りて、匹夫一言の兩句を得たる蘇軾たる能はず、徒らに轉輾反側するのみ、蓋し是れ既にハイカラの冥罰を被ふりたる歟。

偶々一客あり、ビーヤを携へて來る、曰く、諸天より下界を達觀すれば、無數の英雄、虛しく一微塵裡に鬪ふ、請ふ爾と一盞のビーヤを傾けて、陶然一醉、姑らく一念の煩惱を擺脫し、極樂世界に遊ばん、可ならん乎。

記者、首を掉りて辭して曰く、

我れ唯酒に於ては元帥の量あし、ビーヤと雖も、亦飲むに耐へず、我れの酒に於ける猶尾崎行雄の錢に於けるが如き耶、飲むべくして敢て飲まざるに非ず、飲む能はずして飲まざるのみ。

且つ聽け、ビーアは獨逸の田舍酒のみ、シャンパン、葡萄の美酒と比較すべくもあらず、加之ならず、我清酒にも劣れり、清酒は米を以て造り、ビーヤは麥を以て造る、米と麥と其價格孰れか勝れりとする、米と麥と其市價孰れか勝れりとする、我れは既に米を以て造りたる灘伊丹の醸さへも口にせず、何ぞ況や歐洲の田舍なる獨逸の蠻民ごの常用する麥を以て造りたるビーヤをや、客曰く、君の口吻何ぞ夫れ彼の高襟黨に似たる乎。

記者曰く、我れは「あづまのえびす」なり「あづまのえびす」にて は、天保錢と同じく、太政官札と同じく、當世に通用せざるを奈何

ふせん、我れは孔子と同じく、當世に沽らんと欲するものあり「去れど、君聽け、「あづまえびす」にてい、流行後れの呉服物の如く、到底店ざらしと爲るか、田舍廻りと爲るかの外おきを奈何にせん、我れ是を以て、今日「高襟黨」の何物あるかを分析解剖して、以て其特質特色を了し、鵜の眞似をする烏たらんと欲して、轉輾反側す。若し「高襟黨」に就て知る所あらば請ふ誨ゆる所あれ。

客、嫣然一笑、ポックットを捜り、一葉の寫眞を取出して曰く、是れ所謂「高襟黨」の一人なり、寧ろ其標本あり、此標本ゑ就て「高襟黨」を研究せば、蓋し刃を迎へて解くが如きものあらん、古ゑは詩若し成らずんば、罰は金谷の酒數ゑ依らんとの事あり、爾若し能く此ビーヤを飲めば、我れは此寫眞を示めし、以て「高襟黨」たるの資格を説明すべし。

記者、少焉熟考の後、心機頓に一轉したり、乃ち對へて曰く、我れ復た野暮を言はるざべし、我れは唯其寫眞中の所謂「高襟黨」の標本先生と會見して、渙然氷釋するを得ば、區々ビーヤの罰杯、我れゑ於て何かあらんと。

客乃ち杯を呼び、琥珀の綵を湛えて、徐ゑ寫眞を示して曰く、何ぞ其風采の高雅なるや、何ぞ其態度の優美なるや、何ぞ其着物のキコナシのハデなるや、是れ豈「莓」を啖ふて自ら喜ぶ出來合のハイカラならんや、是れ豈布哇あたりへ洋行して、間ゑ合せに仕立てたる贋造ハイカラゑらんや、ハイカラ黨たるには、數箇條の資格を要す。

第一條　洋行したることを振廻さゞるべからざる事

ハイカラ黨たる第一の資格は、洋行するゑ在り、日本の言語文章ハ

能くせずとも、日本の地文は諳んぜずとも、英語を知らざるべからず、若し佛蘭西語を知らば更に上乗ありとす、佛若くは英の外、更に二三箇國の語を生嚙りせざるべからず『僕は佛英の文章あらば、達者に書けますが、日本文はどうも文法が整頓しない野蠻の風があつて、僕には甘く書けません、僕はペンを執るを好みますが、筆を執るとは好みません』と謂いざるべからず、若し相手が默つて讀聽して居れば『僕は英佛の語は、本國の人よりも達者だといはれます獨逸、露西亞、伊太利も一應は知つて居ます、始めは米國の大學で學問しましたが、どうもヤンキイはイケンです、依て更に英國に遊び、更ゐ巴里で仕上げました、二度目の洋行にハ、アノ侯爵の顧問として行つたのです、マッキンレイ、ソリスベリ、チェンベーレンは皆吾輩の知己です、ビスマーク、グラッドストーン、ダスレリー

パーマーストーンの去つてからは、スペクテートル記者のいふ通り宇宙茫々一人の人才もないです　我等豈自愛せざるべけんやです」と謂ざるべからず、若猶默聽して感服した如くあれば「落機山、ニアガラを見、倫敦巴里の繁華を見た眼では、日本は窮屈で、褊小で野蠻で、野暮でたまりません、僕が日本國民として生れたのは、幸か不幸か、容易に判斷が出來んのです、而かし之は彼れ此れ言ふた所が仕方ない、我輩一生の天職は、日本國を擧げて、歐洲の文明に同化させるのです、マア今の政黨の態は何んです、議會の態は何んです、立憲政治い文明の政治です、夫れを何んぞや、野蠻の政黨、野蠻の議會で、どして立憲政治を大成するとの出來ませう、僕は之を救ふは、文明の教育を受けた人物の天職と思うて、君も御承知の如く、此前の擧擧には、何縣の第何區から打て出ましたが、とば

〳〵負けました、けれども僕は決して夫を耻とは致しません、野蠻の議會は野蠻の撰擧區があつて出來るのです野蠻の撰擧區では、野蠻の政治家が當撰するが當然です、僕は寧ろ野蠻の撰擧區を相手にした不明を謝さなければならぬのです、我國民を文明流を敎育するには我國民を一度に洋行させるが、一番速い順序ですか、夫れは出來ない相談だから已むを得ずとして、御互に一つ力を盡くして國民を敎育しやうでありませんか、夫れに付けても、君の早く洋行するのを希望するのです、洋行しない人は、兎ても話にやならぬのです』と飽くまで圖に乘らざるべからず、若し相手が理屈を語り、容易に承知せざれば、直に圓轉滑脫して、『イヤ君い仲々話せる、君は實に文明の何物たるを解して居る、幸ひ僕は其侯爵の知遇を辱うして居る、某侯爵を動かし得るものは、僕一人のみです、先日も侯爵と會食をしました、僕の議論と侯爵の意見とは、符節を合するが如くであります、僕は一つ君を侯爵に紹介しやう』

第二條　無暗に外國語を使はざるべからざる事

外國語を知るものに對つては、少しく注意して外國語を用ゐざるべからず、外國語を知らざるものに對ては、外國語を連發せざるべからず『どうしても日本のレストラント(料理店)は不行儀不規律でイケマセヌ、僕は日本食を以て、アンサニタリ(不衛生)の極と信じます、僕は日本に歸つてからも、重もに西洋料理をやつて居ます、僕のワイフ(妻君)は幸に西洋料理のクッキングが上手です、坐はるといふは、決してシヴイライズしたる國のユーセージとは言へません僕はソーハーに倚り、靜にコユー、エチシヨンの洋書を讀むのが一